月刊 FALCOM MAGAZINE

Vol.15



『空』の名物記者コンビが主役!?

新連載
英雄伝説　空の軌跡
リベール王国スナップショット

ノエル＆ワジが豪華ホテルに潜入!?

英雄伝説　零の軌跡
～午後の紅茶にお砂糖を～

《身喰らう蛇》が動き出す！

空の軌跡外伝 レーヴェ物語

遊撃士も冒険家も食堂においでませ！

みんな集まれ！ ファルコム学園

ファルコム jdk バンド
ドラマー・オカジの

人生半キャラずらし

Falcom FanArt Collection

ティオのファルコムラジオ
めんどくさいです…
でもがんばります
の舞台裏

巻頭特集

那由多の軌跡 最新情報＆キャストコメントが到着



FALCOM MAGAZINE

CONTENTS

第一弾はメインキャラクター紹介＆キャストコメント！

『那由多の軌跡』の一回目の紹介となる今回は、先日公開されたばかりの主人公・ナユタたち３人のキャラクター紹介とキャストコメントを掲載。詳細なストーリーやシステムは次回紹介予定なのでお楽しみに！　キャストコメントもキャラクターが公開され次第、随時掲載予定だ！



好奇心旺盛な主人公
ナユタ・ハーシェル
（声／水橋かおり）

「残され島」出身の 15 歳の少年で本作の主人公。趣味は父の残した六分儀や望遠鏡を使った天体観測。

★ COMMENT

■収録を終えた今の感想と演じられたキャラクターについてお聞かせ下さい。

『零の軌跡』と『碧の軌跡』でティオをやっているんですけど、今回はがらっと変わってナユタという男の子ということで……優しい感じの子なんですけど芯は強いところを表現するのが難しかったです。それに、思っていたより大人でした。ボイスは結構量があったので掴みやすくはありましたね。

■今回主人公役を演じられたということで、前作の『零の軌跡』と『碧の軌跡』でティオ役を演じられたことからひと言お願いします。

うれしくもあり責任重大でもありという感じなんですけど、すごく不思議な気持ちでいっぱいです。那由多に自分が関わる可能性をまったく念頭に置いてなかったので……。那由多の情報が入らない中、いきなりお話がきたのですごくびっくりしました。でも、また軌跡シリーズに関われるんだなと思うととてもうれしいです。反面、ゲーム完成前にストーリーがわかってしまうことが歯がゆく……（笑）。そういう 1 ユーザーな自分と役者としての自分とのせめぎあいが今回もありましたね。

■最後にファンの皆さんにメッセージをお願いします。

今までの軌跡シリーズとは登場人物も舞台も変わりましたが、軌跡シリーズの温かさを継承した、冒険心にあふれたファンタジックな世界観になっています。ゲームのシステムもガラッと変わっているので、新しくプレイするのが楽しくなっていると思います。その辺りはファルコムさんにお任せすれば大丈夫だと思いますので（笑）。どんなゲームになるのか期待してお待ちください。アクションは少々苦手ですが、私もプレイしてみなさんと一緒に楽しみたいと思います！



ナユタが出会う妖精のような女の子
ノイ
（声／茅野愛衣）

ナユタがとある場所で出会う、妖精のような女の子。ナユタのパートナーとなり戦闘を行う。

★ COMMENT

■収録を終えた今の感想と演じられたキャラクターについてお聞かせ下さい。

思ってたよりすごい可愛い感じでした。どうやってナユタとの関係を築いていくのかなと思っていたんですけど、今日初めて通しの台本をいただいて「こういう風になっていたのか！」とあらためて……そうやって冒険の中でどんどん友情を育んでいったり、いろんな敵も出てきて、その関係性がどれもおもしろそうだなと思いながら演じさせていただきました。演じながら一緒にノイちゃんを作っていった感があって、最終的には自分の中でしっくりきてよかったなと思います。

■演じられたシーンの中で見どころを教えて下さい。

出会いのシーンがすごい可愛かったなと思います。シリアスなシーンでもそこにいれば空気が変わるようなキャラなので、ノイちゃんが出てきた時に少しでも和んでもらえたらなと思います。

■最後にファンの皆さんにメッセージをお願いします。

今までのシリーズとして楽しんでいただいていた方も新しい楽しみがあると思いますし、逆に繋がりがないからこそ、初めてプレイする方も楽しんでいただけると思います。私的にはキャラクターそれぞれの可愛さが……もう絵を見てもらえれば想像がつきますね（笑）。ノイちゃん的にはプレイ中にホワンとした気分や楽しい気分が伝わればうれしいなと思います。みなさんもぜひ楽しんで遊んでください！



ナユタの頼れる兄貴分
シグナ
（声／鈴村健一）

「残され島」に住む 18 歳の青年。ナユタの兄のような存在であり、よき理解者でもある

★ COMMENT

■収録を終えた今の感想と演じられたキャラクターについてお聞かせ下さい。

頼れる兄貴を演じさせていただきました。ガッツリ体育会系で「ついてこい！」っていうよりは飄々とした明るいお兄さんですね。子どもの時憧れるようなお兄さんというイメージです。そういう感じがうまく出てればいいなと思います。ファルコムさんらしいファンタジックな独特の世界観は今回も健在です！　昔からゲームをやっている身としては安定のファルコムクオリティーをみなさんに推していきたいと思います。

■演じられたシーンの中で見どころを教えて下さい。

いわゆるステレオタイプなキャラではなく、何かを秘めているキャラクターです。みなさんにきっとビックリしてもらえるんじゃないでしょうか。最後までプレイしていただけると胸が熱くなるようなシーンもありますので、是非シグナというキャラクターを愛してもらいたいなと思います。

■最後にファンの皆さんにメッセージをお願いします。

ファルコムファンのみなさまも待ちに待っていた作品だと思います。ぜひプレイしてくださいね！　僕は今回の作品でファルコムさんと初めてお仕事をさせていただきました！　もし、ファルコムさんの作品に初めて触れるという方がいらしたら僕と同じですね（笑）。同じ一年生として一緒に楽しみましょう！

巻頭特集



最新情報＆キャストコメントが到着！

昨年のタイトル発表以来、謎のヴェールに包まれていた日本ファルコムの最新作『那由多の軌跡』の詳細がついに解禁！さらに今回は、ファルコムマガジンが独占キャストインタビューに成功した！

■ 製品情報

■タイトル　：那由多の軌跡（ナユタノキセキ）
■発売日　：2012年7月26日(木)発売予定
■ジャンル　：ストーリー ARPG
■対応機種　：プレイステーション・ポータブル専用
■プレイ人数：1人
■税込価格　：通常版…6,090円（税抜5,800円）
限定ドラマＣＤ同梱版…7,980円（税抜7,600円）
■CEROレーティング：未定

英雄伝説 零の軌跡 ～午後の紅茶にお砂糖を～



著：むらさきゆきや
イラスト：窪茶

第3話『ノエルの休日』

雲ひとつない快晴だった。

東通りには風車や果物屋が商品を並べている。

ロイドは特務支援課の仲間たちと手分けして聞きこみをしていた。

もう昼過ぎだ。ひととおり情報を集めたし、そろそろ約束した合流場所へ向かおうか、と思ったとき――

「ん？　あれは……」

白いニット帽とノースリーブセーターに短パンという愛嬌がありながらも快活な格好の少女に目をとめた。

手すりにもたれて、ぼんやりと陸橋の下を走る導力列車を眺めている。

「やあ、ノエル曹長じゃないか」

「わわっ……ロイドさん!?　お疲れ様です！」

私服だってのに彼女は、お手本として警備隊の教本に載りそうなほど寸分の隙もない敬礼をした。

「はは……相変わらずだな。その服からすると今は休暇じゃないのか？」

「あ、そうでした。あわてると、つい出ちゃうんですよね」

「別にいいんじゃないかな　」

「え？」

「それだけ、ノエル曹長が警備隊の仕事に真剣だってことだから」

「あ…………」

少女の頬が、わずかに赤くなった。

ノエル・シーカーが所属しているのは、この街（クロスベル）の警備隊だ。

警備隊は外敵から自治州を守るための組織であり、軍隊のようなものだが――政治的にも地理的にもエレボニア帝国と



カルバード共和国に挟まれた特殊性ゆえ、様々な制約を課せられている。

　名称や装備だけでなく、訓練の内容にまで。

「警察官の俺が知ってる事情なんて、ごく一部だろうけど、予算も装備も限られたなかで他国の軍隊と同じ重責を担ってるんだ。警備隊は本当にすごいよ」

「うーん、そうなんですかね。目の前のことで精一杯やってるだけですけど……いまいち実感ないです」

「……なにかあったのか？」

「え？」

「いつもより元気がないみたいだ。それに、たいてい休暇はフランと一緒なのに、今はひとりみたいだし」

　ノエルとフランは姉妹で、とても仲がいい。ノエルは警備隊員でフランは警察官だが、休日を合わせて出かけるほどで、とくに妹のフランが〝お姉ちゃん大好きっ子〟なのは警察内でも有名だ。

「ふふ……ロイドさんにはかなわないなぁ……さすがは捜査官ですね」

「俺が聞いていいことなのかは、わからないけど……」

「いえ、せっかくだから聞いてください。といっても、情けない話になっちゃいますけど」



　二日前――

　ノエルは巡回の途中、古戦場の前でクルマを停めた。

　助手席のバレル隊員が身を乗り出す。

「なんだこれは⁉」

「酷いですね」

　古戦場は見通しが利かない地形のうえ、街道に比べて強い魔物が棲んでいるのでゲートで封鎖してあったのだが、それが何者かに押し破られていた。

　ノエルとバレルは軽装甲車から降り、ゲートを調べる。

「魔法（アーツ）とか火薬ではなく、強い力で押し開けたみたいですね。ゲートが曲がっちゃってます」

「つ、強い力だって……？　まさか、大型の魔獣が……あわわ」

「いえ、これは……おそらく、導力車で押し通ったんだと思います」

「なんだって⁉」

「ほら、ゲートに黒色の塗料がついてます。タイヤの跡もあります」

「なんだ、導力車の仕業か。ほっとしたよ……月の僧院のことを思い出しちゃったじゃないか」

「あのときは大変でしたね」

　ノエルは肩をすくめる。

　以前、月の僧院に出現した奇怪な魔獣を発見したとき、バレルが驚きのあまり寝込んでしまったのだ。

「ふふん、人間がやったとわかれば怖いことはないぞ。どこの誰だかしらないけど、きっちり捕まえてゲートを弁償させてやらないとな！」

「はい！」

「でも、ふたりだけで古戦場に入るのは危なそうだから、応援を呼ぼうぜ！」

「あ、そうですね」

　ノエルはエニグマ――通信機にもなる第5世代戦術オーブメントを取り出し、連絡を取る。

『はい、こちらタングラム門警備隊であります！』

「巡回警備中のノエル曹長です」

『お疲れ様です！』

「ソーニャ副司令に繋いでもらえますか？」

『すみません。副司令は、急に本部から呼び出されてご不在であります』

「また？　最近、多いですね……」

『なにかありましたか？』

「ええ、今、古戦場のゲートにいるんですが――」

　ノエルは状況を説明し、応援を要請した。

　ここまでは問題なかった。警備隊のマニュアル通りの手順だ。

　ところが、古戦場の奥から発砲音が聞こえてきた。

　ノエルとバレルは顔を見合わせる。

「ゲートを押し通った人が、戦ってるんでしょうか？」

「今のは、機関銃の音じゃなかったか？　ただの民間人じゃなさそうだぞ？」

「だとしても、誰かが魔獣と戦っているのは間違いありませんね……」

「なあ、ノエル曹長、妙なことは考えるなよ？　ゲートを壊して機関銃を持ってるようなヤツだぞ。応援を待って慎重に行動したほうがいい」

「たしかに、危険はあるかもしれません……でも、誰であろうと民間人を守るのは警備隊の重要な役目です。応援を待っていたら手遅れになるかもしれないんです！」

「う、うーん……ああ、もう……本当に月の僧院のときを思い出しちゃうよ。よし行こう、ノエル曹長！」

「はい！」

　古戦場――

　わずかなタイヤ跡を追って奥に進んだノエルたちは、ちょ

うど魔獣に囲まれているトラックを見つけた。

「黒色のトラック……!!」

「ノエル曹長の言ってたとおりだね。前のほうに傷がついてる」

箱形（バンボディ）トラックの周りには、黒ずくめの機関銃を持った男たちが、全部で四名ほど。

巨大な牙を持つトカゲのような魔獣――ブレードファングと戦っていた。

「くそっ！　ぞろぞろ寄ってきやがって！」

「おい！　もう充分だ、引き上げるぞ！」

「待て、導力車を攻撃されたらまずい……ん？」

「け、警備隊か!?」

こちらに気づいたらしい。

ゲート破りの犯人と、魔獣――どちらも放ってはおけない。

ノエルは迷ったが。

「警備隊です！　魔獣はあたしたちに任せてください！　貴方たちには事情を聞かせてもらいます。そこで動かないでください！」

犯人たちの前に飛び出し、魔獣に電磁ネットを浴びせた。

バベルがアサルトライフルで支援する。

「命令、聞くかな？」

その懸念はノエルにもあったが、まさか魔獣と一緒になって犯人たちを攻撃するわけにもいかない。

黒ずくめたちが、ニヤリと笑った。

「助かったぜ、警備隊さんよ」

「くく……まったくだな」

「よし、行くぞ！」

「急げ！」

連中はトラックに乗りこむと、ノエルの言葉など無視して逃げ出してしまった。

「なっ!?」

「は～、やっぱりこうなったか……応援の連中が間に合ってればいいけど……」

「くっ……」

ノエルたちは急いで魔獣を倒し、ゲートまで戻ったが、すでに犯人の姿はなかった。

その日の夕方。

本部から帰ってきたソーニャ副司令に、ノエルは古戦場での顛末を報告した。

「すみません……犯人を逃がしてしまって……」

「ノエル曹長の判断は正しいわ」

「しかし……」

ソーニャ副司令は、ふたりだけで突入した危険性や、犯人を逃がしてしまった過失を「仕方がない状況」と言ってくれた。

しかし、ノエルには自分が失敗したという思いが強かった。

副司令が眉をしかめる。

「最近、珍しい魔獣を自治州外のコレクターに売るブローカーがいるらしいわ」

「魔獣をコレクション……ですか!?」

「ええ、危険だと思うけれど、魔獣を保護する法律なんてないものね」

「古戦場には街道では普段見ることができないような珍しい魔獣がいます……つまり、今日の犯人は……」

「そうと決まったわけではないけれど」

「やっぱり、あたしが捕まえてれば！」

「ふぅ……仕方がないわね。ノエル曹長……」

「はい！　全力で捜索します！」

「そうね。ただし、三日ほど休みを取りなさい」

「ええっ!?」

「これは命令よ。復唱」

「……あ、はい（イエス・マム）……ノエル・シーカー曹長……三日間の休暇を頂きます」

「ゆっくり街を見てくるといいわ」



「――というわけなんですよ」

ノエルはうつむいて、肩を落とした。

ずっと黙って聞いてくれていたロイドが、ゆっくりとうなずく。

「なるほど。それで、休暇だっていうのに落ちこんでたのか」

「自分が情けなくて……ハァ……」

「うーん……でも、ソーニャ副司令は正しい判断だって言ってたんだろ？　俺も同感だな」

「でも、結局、犯人を逃がしてしまったから……」

「それは仕方ないんじゃないか？」

「警備隊は忙しいのに、こうして休暇を与えられてるのは、やっぱり反省しろってことだと思うんです。私は副司令のお役に立ててないのかも……」

「いや、ノエル曹長……君に限ってそんなことは――」

そのとき、ロイドのエニグマに着信があった。「すまない」と断ってから彼は懐から取り出し、ボタンを押す。

「はい」

スピーカーから少女の澄んだ声が漏れ聞こえてくる。どうやら、相手は特務支援課の仲間――エリィだった。

『ロイド、集合時間を過ぎてるけど……なにかあったの？』

「あぁ、ごめん。ちょっと話しこんでたんだ」
『まだ東通り？　もうみんな集まってるし、そちらに行きましょうか？』
「いや、大丈夫だ。予定通り中央広場で落ち合おう」
『わかったわ、待ってるわね』
　ロイドが通信を終えた。
　ノエルは申し訳なくて頭を下げる。
「すみません……お忙しいところ、長話してしまって」
「いや、俺のほうこそ途中になってしまって、すまない」
「あたしは大丈夫ですから、早くみなさんのところへ行ってあげてください」
「……わかった、また会おう。俺も、ノエル曹長にはゆっくり街を見てほしいな」
「え？」
「それじゃ」
　ソーニャ副司令と同じ言葉を残して、ロイドは足早に中央広場へと向かった。
　彼の姿を見送ってから、ノエルはため息をつく。
「ゆっくり街を見る……か。そんな気分でもないけど、線路ばかり眺めてるのも時間がもったいないかな」
　ノエルは龍老飯店で遅めの昼食を取ることにした。



　龍老飯店の名物——天下一炒飯は、ぱらぱらの米粒にもかかわらず噛むとふっくらで、口のなかで味と香りが広がる。
　醤油と胡椒に、エビやカニなど海鮮の風味が添えられ、どれだけ食べても飽きがこない。
　スープや餃子との相性も最高だった。
「ふぅ〜、堪能したな〜」
　タングラム門の食堂にいるティマスの料理も美味しいが、この味はこの店でないと味わえない。
　看板娘のサンサンが話しかけてきた。東方風のドレスがよく似合っている。腰まわりの細さなんて同性でも見とれてしまうほどだ。
「お客さん、いい食べっぷりね」
「え？　あはは……そ、そうですか？」
「おかわりはどうする？」
「ふふ、おなかいっぱいです。ごちそうさまでした」
「ありがとうね！」
　ノエルは支払いを済ませると龍老飯店を後にした。
　ぐっと伸びをする。
「う〜ん、いっぱい食べたら、ちょっと元気が出たかな」

　我ながら単純だなぁ、と思う。
　さて、次はどこへ行こう？
　いつもならフランが新しい店とか、特売セールとか、イベントとか、あれこれ下調べしてくれるのだが、今回は急だったため、彼女のほうは休みを取れなかった。
　フランのがっかりした声を思い出す。
「……なにか買っていってあげようかな」
　東通りの屋台を眺めてみる。クマのヌイグルミも売っていた。
　あのクマ、うちの子に似てるかな？　でもうちの子のほうがかわいいよね——なんて思ったり。
　ふらふらと見てまわっていたら、ドンと肩が当たってしまった。
「あっ、すみません」
「へへ……いや、こちらこそ。よそ見してたもんでさ」
　相手はノエルより少し年上くらいだろうか。背は高いが痩せており、ひょろっとした印象がある。
　髪は長くて鎖のネックレスをぶらさげ、金の指輪をつけていた。物腰はやわらかいが、ちょっと威圧感がある。
「君さ、このへんじゃ見かけない顔だけど、旅行者かい？」
「え？　いえ……」
　最近は休暇を取れてなかったし、フランと一緒だと東通りに来ることは少ない。
「ふーん、じゃあ、地元（クロスベル）の人？」
「そうですね」
「そうか……今、ひとり？」
「ええ」
「へへ……とっておきのお買い得品があるんだ。よかったら、特別にわけてあげるよ」
　愛想のいい笑顔を向けてくるが、どうやら物売りのようだ。
「いえ、そういうのは……」
「そう言わないでさ。な？　こっちに来てくれよ。人前じゃ見せられないんだよね」
「……」
　ただの物売りというには、すこし胡散臭い。
　警察の真似事をする気はないが、詳しい話を聞いてみることにした。
　東クロスベル街道へと伸びる通り道へと連れてこられる。
　この時間に街を出入りする人は少ないらしく、周りは閑散としていた。
「そのお買い得品って？」
「へへ……幸運を呼びこむ魔法のアイテムさ」
「まさか……!?」

しばらく前に起きた事件を連想し、ノエルは警戒心を強める。

だが、彼が懐から出したのは、ぜんぜん関係のなさそうな品物だった。

「……メダル？」

「こいつは、幸運を呼びこむメダルさ。今なら半額にしてあげるよ。お買い得だろ？」

どこかの国の硬貨だろうか。初めて見るデザインだが、それほど特別な物ではなさそうだ。金や銀というわけでもないみたいだし。

「はぁ……たんなる縁起物か」

「本来は20000ミラするが、10000ミラでいいぜ」

「えっ⁉」

法外な要求に絶句した。

「なんなら、持ってるミラ、全部でもいいけどな」

「あなたは……‼」

長髪の男から愛想笑いが消えていた。恫喝するような鋭い血走った目つきで睨んでくる。

気がつくと、ノエルの背後に似たような風体の男がふたりほど近づいていた。

仲間がいたらしい。

囲まれてしまう。

「へへへ……」

「お嬢ちゃん、さっさと買ったほうがいいぜ？」

「そうそう、幸運のメダルがあれば、ケガをしなくて済む。ありがたいだろ？」

「くっ……‼」

こんな連中でも市民は市民、警備隊員である自分がケガをさせるわけには。

しかし、これは犯罪だ。放っておくこともできない。

なんとかケガをさせずに捕まえて、警察に知らせないと、とノエルは、あれこれ考える。

男が怒声をあげた。

「さっさと出すもん出しな！ 俺たちはこの街を牛耳っているテスタメンツなんだぜ⁉ 地元のやつなら、当然、知ってるはずだよな⁉」

「なんですって⁉」

テスタメンツは旧市街を根城にする不良グループだ。

しかし、そのリーダーは、一般市民への押し売りなどという卑劣な犯罪をさせる人物とは思えなかった。

さほど面識があるわけではないが……

あのロイドが気を許すくらいには、筋の通った人物だったはず。

そのとき――

彼らの背後に、すっとひとりの青年が立った。

中性的な美貌の持ち主だった。皮肉めいた笑みを唇の端に乗せる。

「やれやれ、テスタメンツに君たちみたいな恥知らずがいたなんて、知らなかったな」

男たちが慌てて振り返った。

「なっ⁉」

「なんだ、てめえ⁉」

「ッ⁉ 待て……こいつは……‼」

長髪の男の制止も聞かず、ふたりが殴りかかる。

「すっこんでろ！」

「くらえ！」

「シッ」

短い呼気と同時に、青年が左手の拳を放った。

男たちには見えなかっただろう。

常日頃から警備隊で戦闘訓練を受けているノエルだからこそ、かろうじて動きを追うことができた。

それほど、速い。

「ガッ……⁉」

「グゥ⁉」

うめき声をもらして、殴りかかった男たちふたりが膝をつく。

最初にノエルに声をかけてきた長髪だけは、青年を知っていたらしい。

「……ワ、ワジ」

「ああ、ワジ・ヘミスフィアさ。一応、テスタメンツのヘッドをやらせてもらってる。君のことは見たことないけどね」

「う、ううぅ……行くぞ、おまえら‼」

「ぐぅぅ……」

「おぼえてやがれ……‼」

男たちが逃げていく。

ぽかん、と見ていることしかできなかったノエルだが、あわてて追いかけようとする。

「ちょ……あなたたち！ 警察に……‼」

「いいから」

ワジに止められた。

その表情は氷のよう――今の男たちを寛大に許したという雰囲気ではない。

「なにか、あるの？」

「どういう意味だい、僕はべつになにも……おや お姉さんは……」

「あたしは警備隊のノエル・シーカー曹長です」

「ああ、ロイドと一緒にトリニティに来たことがあったよね。軍服も似合ってたけど、今日の格好も、なかなかいいじゃな

い」

「そ、そんなことより……なぜ、あの人たちを逃がしたの？」

「あんなの小物だろ？」

「君は気にしないかもしれないけど……ああいうのを放っておいたら、この街が、どんどん市民にとって危険な場所になっちゃうんだよ!?」

「やれやれ、またお説教かい？」

「必要なら何度だってします」

「……ただ逃がしたわけじゃないさ。あれは僕のほうで始末をつける」

「やっぱり、なにか理由があるのね」

「お姉さんは警備隊の人だろ。市内の治安なんて管轄外じゃない？」

「見なかったことにしろって言うの？　そんなことできないよ。管轄なんて関係ない」

「ふむ……困ったな」

「ちゃんと話して」

　じっ、とワジを見つめる。

　彼は視線を逸らしていたが、ノエルの真剣さは感じているはずだった。

「……人が見てるよ？　笑われてる」

「ごまかしたって無駄です！」

「やれやれ……仕方ない、ついてきなよ」



旧市街、プールバー《トリニティ》――

　地下にあるいかがわしい雰囲気の店だった。

　以前、来たことがあるが、あのときはロイドたちと一緒だった。

　今はノエルひとりだ。

　腰掛けたソファーの対面にワジが座っている。

　彼の背後にはスキンヘッドで巨躯の男が立っていた。

　そして、遠巻きにしているが、そろいの青装束をまとった男たちがこちらを見ている。彼らこそ本物のテスタメンツだろう。

　緊張する。

「……」

「ふふ……まさか、ここまでついて来るなんてね。ノエル、君って意外と迂闊じゃない？」

「一応、ワジくんを信用してるから」

「へえ？　そんなに僕と親しかったっけ？」

「そうね……正確には、あたしが信用してるのは、ロイドさんだと思う」

「ふぅん、なるほどね」

「ワジ君に多少の問題はあるかもしれないけど、あのロイドさんが信用している人なのだから、あたしも信用しようと思う」

「……ただの考えなし、というわけでもないか」

「あの人たちを逃がした理由、教えてくれないかな」

「ＯＫ」

　ワジが指を鳴らすと、テスタメンツのひとりがワインとグラスを持ってきた。

　手慣れた様子でグラスにワインを注いでいく。

「ちょっと君、未成年でしょう!?」

「前にも言っただろ？　ノンアルコールさ」

「し、信用できません！」

「……今、僕を信用してるって言ったばかりじゃないか……ほら、君も試してみたら？」

「う……」

　ノエルは差し出されたグラスを受け取りはしたものの、口はつけなかった。

「さて、連中に関してだけど……これはアッバスのほうが詳しいかな」

　話を振られ、ワジの背後にいる大男が口を開いた。意外にも落ち着いた口調で、まるで神父のようだ。

「三ヶ月ほど前のことだ。彼らはテスタメンツに入りたいと言ってトリニティにやってきた。ちょうどワジは留守にしていたが、そもそもテスタメンツはワジを信望するメンバーが集まって自然とできたもの……入るのも出るのも、決められたルールは存在していない」

「それじゃ、彼らはメンバーの一員なんですか？」

「いや。いくらルールはないといっても、不適格な者であれば、俺が入団を拒否している」

「え？　でもワジ君がテスタメンツのヘッドのはずじゃ……」

「チームのことはアッバスに任せてるからね」

「そ、そうなんだ……」

　不良グループのイメージからは遠いけれど、そんなこともあるのかもしれない。

　アッバスが話を続ける。

「俺の見立てでは、あの者たちは表で恭順を示しながら裏で悪事を働くような輩に思えたのでな」

「ちょっと会っただけで、そんなことまでわかっちゃうんですか!?」

「その後、街で恐喝をすることまではわからなかったがな」

　アッバスは口を閉ざした。

　テスタメンツのメンバーから渡されたメモを見ていたワジが、話の後を継ぐ。

「まぁ、そんなわけで……彼らはテスタメンツってわけじゃないけど知らん顔もできないからね。この件は僕たちが始末する。警察や警備隊はお呼びじゃないのさ」
本来ならば、当然、警察に通報するべきだろう。
しかし、彼らは街の不良グループだ。そんな理屈が通じるはずもない。
「あれ？　でも、おかしくない？　それなら、なおさら逃がした理由がわからないんだけど……」
「群れないと悪さもできない小物たちが、テスタメンツを騙ってメダルの押し売りなんて、ちょっと巧妙すぎると思わない？」
「あ……言われてみれば……」
「黒幕がいるのさ。そいつは街の不良を使ったり、以前のマフィアのルートを利用して、ずいぶん強引にミラを掻き集めてるみたいだ」
聞き捨てならない言葉が飛び出して、ノエルは身を乗り出した。
「マフィアのルート⁉」
「もう、個別の事件については警察が動いてる。特務支援課にも要請が行ってるみたいだよ？」
「なっ⁉」
警察の一部署である特務支援課への要請が、こんな不良グループに流れているなんて驚きだった。
あとでフランに伝えておかなければ、と思う。
ワジがグラスを傾ける。ルビー色の液体が形のいい唇を濡らした。
「ふふ……おしゃべりはおしまいだよ。これから僕は用事がある。さあ、お客様がお帰りだ」
彼がソファーから立ちあがる。
同時に、テスタメンツのメンバーたちがノエルに近づいてきた。
まるで教主に従う信徒のようだ。
先ほどの長髪の男たちとは全く違う不気味な威圧感。
「くっ……事情を知った以上、あたしだって見て見ないふりをすることはできない！」
「ワジの言葉は絶対だ。ここは帰ってもらおう」
「きみ、ボタンが取れかけてる！」
「え？」
ノエルに手を伸ばそうとしていた青年が、あわてて胸元を確かめる。
「そっちのきみはリストバンドが緩んでる！　制服を着るなら、きちっと着なさい！」
「や、Ｙａ（ヤー）・」
もうひとりのメンバーも、ノエルに気圧された。

このまま黙って帰るわけにはいかない。
「ワジくんの〝用事〟って、その黒幕に絡んだことだよね？　それなら、あたしも行く。このまま放っておくなんてできないもの！」
「やれやれ、そのクソまじめな性格、誰かさんを思い出すね。これは、なにを言ってもムダかな？」
「ちゃんと戦力になるから」
「その格好でかい？」
「非番だけど、緊急招集に備えて最低限の装備はもってきてる」
ノエルはバッグからサブマシンガン（ラピッドフレイム）を取り出した。
びしっ、と見せつける。
ところが、ワジが肩を揺らして苦笑した。
「いや……そういうことじゃなくてさ。ふふ……アッバス、こちらのお姉さんに服を用意してくれるかな？」
「いいのか？」
「まぁ、女性が同伴してるほうが警戒されにくいしね」
ノエルの頭に「？」マークが飛んだ。
てっきり黒幕の居場所に乗りこむのだと思っていたのだが、違うのだろうか。
「僕の見立ててでは、84、60、86でDってところかな」
「え？　あっ⁉　ちょっ……ええええっ⁉」
ワジが貴婦人をエスコートするホストの笑みを浮かべた。
そういえば、彼の副業は……
「ふふ……最高級のレストランに入るなら、ドレスは当然じゃないか」
「な、なに？　服って、どういうこと⁉」
淡々とアッバスがうなずく。
「ふむ、ではすぐ用意しよう」
「その反応は当たりみたいだね」
ノエルは思わず胸元を両手でかばった。ちゃんと服を着ているのに、まるで裸にされたみたいに恥ずかしい。

歓楽街――
ノエルたちはクロスベルが誇る最高級レストランのひとつ《プレミアム》の前にいた。
細長い塔のような建物が全てVIPをもてなすための店になっている。
夜の街で窓明かりに照らされ佇む、蒼い正装に身を包んだワジは、まるで物語の世界からやってきたかのようだった。
「ヒールは低めにしたけど、慣れないかな？」
「え？　あ、うん……それに、このひらひらしたのが……」

ノエルに用意されたドレスはピンク色で、フリルスカートはかわいらしいが、胸元も背中も開いた艶っぽいデザインだった。

恥ずかしくて外に出られない、と半泣きになっていたら、ワジが白いファーショールを羽織らせてくれたのだ。

一応、気遣われているのかもしれない。

上等な絹に、本物の毛皮。

形のいいリボンと、揺れるフリル。

——こんなの、フランだったら似合いそうなドレスだけど、あたしには似合ってないだろうな——とノエルは、こっそりため息をついた。

「レストランに入れば、しごく当然の格好さ。あまり恥ずかしがってると目立っちゃうよ？」

「そ、そうだよね……」

ノエルは警察官ではないが、これは潜入捜査のようなものだ。おどおどして犯人に警戒される新米みたいな失敗はしていられない。

小さなバッグに納めた銃の重みを確かめる。

「大丈夫……行こう、ワジ君」

「……へえ、仕事をする顔つきになったね」

ワジに連れられて、ノエルは《プレミアム》の四階を訪れた。

黒を基調とした内装。

意外と柱が多く、テーブルのほとんどに視界が通らない。

個室のように区切られてはいないのに隣の客と目が合うことはない。そんな造りだった。

店の奥にはグランドピアノが置かれ、綺麗な女性ピアニストが静かな曲を奏でている。

「見てごらん、奥のほう」

「ピアノの横？」

黒色の扉があった。

「ああ……詳しいことは、テーブルで話そうか」

「うん」

「足元が暗いから、気をつけて」

すっと、左手を取られる。

ごく自然な動作なものだから、思わず手を預けてしまった。

「あ……」

今さら急に離したら、変に目立ってしまうだろうか。

うつむく。

いつもノエルは警備隊で戦闘をこなしているから。

女性らしいすべすべした肌ではない、と思われやしないか、気になってしまった。

まさか尋ねるわけにはいかないけれども。

「うぅ……」

ウェイトレスに案内されて、ノエルたちは入口近くの席に

腰を下ろした。

このテーブルも他から柱の陰になっている。

「ピアノの横にドアがあったろう？」

「うん」

「あの先がVIPルーム。今回の事件の黒幕は、そこにいる」

「え⁉ どうして、そこまでわかってるの……？」

「街で悪さをしてる小物たちが、僕に締め上げられたんだ。当然、ボスのところへ行って、こう尋ねるだろう。〝ワジに目をつけられた。どうしたらいい？〟ってね」

「そのために、彼らを逃がしたの⁉」

つうっ、とワジが人差し指をノエルの唇に触れた。

「レディが……大きな声を出したらだめだよ？」

「ご、ごめん」

マナー違反でもあるが、そもそも目立ってしまってはいけない。そのうえ、唇に指先で触れられて、ノエルは恥ずかしさに顔が熱くなった。

きっと耳まで赤くなっているに違いない。

ウェイトレスが注文を取りに来た。

ワジがメニューも見ないで料理を選び、すらすらとワインまで注文する。

「ちょっと、ワジ君……」

「目立たないほうがいいだろ？」

「ぐっ……」

さすがのノエルでも、ここで言い争うほどバカではない。飲まなければいいだけだし、犯人たちに気づかれないほうがいい。

店員が一礼して立ち去り、またふたりきりになる。

「ふふ……さしずめ、若いホストと、初めてホスト遊びをする良家のお嬢さんってところかな？」

「はぁ⁉」

「僕がホストだってことは、店の者たちは知ってるし。そう思われてたほうが好都合だろ？」

「う……ま、まぁ……」

「それで、さっきの話の続きだけど——」

「だいたい、わかったわ。ワジ君は、わざと逃がして仲間に後をつけさせたんでしょ？」

「正解」

「そして、あたしと話してるうちに、その仲間が戻ってきてメモで報告したんだよね」

「へえ？ メモを見てたことに気づいてたんだ。なかなか、やるじゃない」

「ソーニャ副司令の薫陶（くんとう）を受けてるから」

「タングラム門の副司令か。聞いたことはあるよ、有能らしいね」

「そりゃもう、実質的に警備隊のトップと言ってもいいくらいだし」
「今度、司令に就任するらしいじゃない」
「えっ⁉ まだ一般への情報公開はしてないのに⁉」
「ふふ……でも警備隊のなかでは発表されてるだろ？」
「それは、まぁ……あ、言えないよ」
　ウェイトレスが前菜（オードブル）を運んでくる。お皿の絵が透けるほど薄く切られたハムが乗っていた。
　ノエルは目をしばたたく。
「これが高級なんだね……警備隊の食堂だと、お皿にどっさり盛られてるんだけどな……すごく高いのに量が少ないなんて、ちょっと不思議な感じがする」
「食べてみれば、肉の魅力が量と歯ごたえだけじゃないってわかると――」
　ワジが声を潜めた。
「……出てきたよ」
「ッ⁉」
　柱と柱の合間から見覚えのある長髪と、その仲間たち――三人組の姿が見えた。
「ビンゴ。報告は正確だったね」
「なんとか隙を見つけて捕まえないと……」
「いや、僕たちのターゲットは、VIPルームの中のほうさ。小物はアッバスに任せよう」
「来てるの？」
「ぞろぞろ大勢で動いたら目立つから、僕たちの後から来て、このビルの外で待機する手筈になってる」
「そうなんだ……ワジ君もだけど、あのアッバスさんも、とてもただの不良とは思えないんだけど」
「ふふ……そうかい？」
　三人組がテーブルのそばを通り過ぎ、そのまま店の外へと出て行く。
　気づかれないよう、ノエルたちは前菜を食べて客のふりをし、やり過ごした。
「ふぅ～、行ったみたいね」
「前菜（オードブル）、なかなか美味しかったろ？」
「う……舌のうえでとろける肉があるなんて知らなかったわ。これは、ちょっとダメかも……」
「おや？ お口に合わなかったかい？」
「しばらく他のハムが食べられなくなっちゃいそう」
「ふふ……次はスープ、その次は魚料理が出てくると思うよ」
「そうなんだ。はぁ～……他の料理も食べてみたいけど……そういうわけにはいかないものね！」
　ノエルは苦笑しながらバッグを手に取る。見た目に反した重みが、今は心強い。

　肩をすくめてワジが席を立った。
「――じゃあ、行こうか」
「ええ！」

　ワジが顔見知りのウェーターに耳打ちし、店から人払いするよう言いつける。
　ノエルはバッグからサブマシンガンを取り出し、ピアノの近くにあるドアを引き開けた。
　踏みこむ。
「全員、動かないでください！」
　室内の者たちへと銃を向けた。
　中央にテーブルがあり、酒瓶がならんでいる。左右向かい合わせのソファーに、四人の男たちが座っていた。
　黒ずくめの格好をした男たちが、驚愕に目を見開く。
「なっ⁉ なんだ、てめえら⁉」
「警察か⁉」
「うわぁ、う、撃つな！」
「チッ……あのガキども、つけられやがったか……」
　腰を浮かしかけた相手にノエルは銃口を向ける。見覚えのある連中だった。
「あ、あなたたちは！」
「おや、知り合いかい？」
　一緒に部屋に踏みこんだワジが、意外そうな声で訊いてきた。
　ノエルは視線を犯人たちから外さず、うなずく。
　間違いない。
「ええ……先日、古戦場でね」
　黒ずくめの一人が気づいたようだ。
「もしかして、おまえ……あのときの警備隊か⁉」
「そうです。魔獣から助けてあげたのに、無視して逃走したのはあなたたちですね？ 今度こそ、じっくり事情を聞かせてもらいますよ⁉」
　ワジが小首を傾げる。
「この連中は、マフィアのルートを使ってミラを集めてるらしいけど、そのとき警備隊に見つかったのかな？」
「おそらくね……珍しい魔獣をコレクターに売るブローカーじゃないかって、ソーニャ副司令は言ってた」
「魔獣を？ それは妙な商売をはじめたものだね。ふむ……もう他の裏組織が台頭してるから、まともなルートが残ってなかったのかな」
　チッ、と黒ずくめのひとりが舌打ちする。
「よく知ってるじゃないか……ワジ」

「君の名前は知らないけどね」
「俺はドゥッチオだ。まぁ、覚える必要はないがな……例の一件のせいでルバーチェ商会は力を失い、ほとんどの取引先は黒月（ヘイユエ）に押さえられちまった……だから俺たちは、工夫してミラを稼ぐことにしたわけさ」
「工夫？　無茶の間違いじゃない？　荒っぽい稼ぎ方だよね。警察に目をつけられ、警備隊と揉めて……ぜんぜん長く続ける気はないって感じだ。短期間で資金をためて外国に高飛びってとこかな？」
「なんですって⁉」
　ワジの洞察に、ノエルはもちろん、ドゥッチオたちも驚いていた。
「チッ……頭の回る面倒な野郎だ！　そのとおり、だから、俺の名前は覚える必要がないのさ。帝国へ行ったら変えるつもりだからな！」
　周りの黒ずくめたちから笑いがもれる。
「くくく……そうだな。帝国人らしい名前がいい」
「ギリアスってのはどうよ、大物になれるかもな！　ハハハ」
　ノエルは不審に思った。
　不良グループのヘッドであるワジがいて、銃を構えた警備隊の自分がいる状況で、なぜ彼らは落ち着いていられるのだろうか。
　切り抜ける策があるというか。
　それは、いったい？
　ドゥッチオが胸元に手を置いた。
「ここには、導力通信機を改造したスイッチが入ってる……何に使うと思う？」
「仲間でも呼ぶつもり？」
「くくく……そんなものはいない。こいつは、爆弾に繋がってるんだ！」
「爆弾⁉　いったい、どこに……⁉」
「この建物の中さ！」
「そんな⁉」
　高級ホテル《プレミアム》には、大勢の重要人物が訪れている。
　もしも、爆破されて死傷者が出たら、大変なことになるだろう。
「俺たちはかまわないんだぜ？　ちょいと上のほうのフロアが吹っ飛ぶだけさ」
　ドゥッチオが胸元から、スイッチを取り出す。手に握れるていどの黒色の筒に赤いボタンがついていた。
　獣のような笑みを浮かべる。
「どうする？　その銃で俺を撃ってみるか？　もしかしたら、はずみでボタンを押しちまうかもしれねえけどな！」

「くっ……」
　ノエルは市民の安全を守る警備隊員だ。警察官と管轄こそ違うものの根底は変わらない。
　いや、どんな立場であろうと変わらないだろう。
　犯人を捕まえるために誰かの命を犠牲になんてできない。
　ノエルは銃をおろした。
「ううぅ……」
「もしかして、また逃がすのかな？」
　ワジが肩をすくめる。
　ぐっとノエルは歯がみした。
「人命は最優先だし、この状況じゃ……」
「まぁ、そうだね。今回は下調べが足りなかったかな。まさか、ホテルに爆弾をしかけてるなんてね」
　武器は持っていなかったワジだが、降参の証に両手を軽く挙げた。
　ドゥッチオたちが哄笑する。
「ふはは！　好い様だな！　警備隊員とテスタメンツのワジが言いなりとは！」
　下衆な物言いに、ワジが眼光を鋭くした。
「べつに僕はホテルを爆破されてもかまわないよ？　君たちが破滅を望むならね。このお姉さんに絶対に従わなければいけない理由はないんだし？」
「ぐっ……」
　ドゥッチオたちが気色ばむ。
　ノエルは眉をひそめたが、彼の立場ならホテルの従業員や宿泊客より、相手を捕らえることを優先しても不思議はない。
「ワジ君……」
「わきまえてるよ。彼らが紳士的なうちは、ね」
「ふんっ。まぁ、いい……行くぞ」
　ドゥッチオが立ち上がる。
　他の黒ずくめたちが、「移動するのか？」と尋ねる。
「ああ、警備隊だの不良だのに乗りこまれたってことは、他の連中にも見つかってる可能性が高いからな」
「なるほど。まずいな」
「よし、移動しよう」
「もうミラも充分あるしな！」
　他の者たちはともかく、リーダー格のドゥッチオという男は頭が切れるようだ。
　スイッチを見せつけるようにして命令してくる。
「ゆっくりと部屋を出るんだ。おかしな真似をしたら……わかってるな？」
「言われなくとも……」
「君こそ、うっかりで押さないでくれよ？」
「減らず口を叩くんじゃねえ」

VIPルームを出ると、ピアノの演奏をしていた女性も、店員たちの姿もなくなっていた。

　ワジの言葉に従い、みんな逃げたようだ。もちろん客もいない。

「くそっ！　店の連中、ふざけやがって！」

　ドゥッチオが苛立たしげにテーブルを蹴飛ばす。派手な音をたてて倒れ、ガラス板が砕け散った。

　ノエルは厳しく叱りつける。

「なんてことするの⁉」

「うるせえ！　早く行け！」

「くっ……」

　廊下に出て、エレベーターに乗る。

　黒ずくめはレストランの地下へと向かうボタンを押した。

かすかな浮遊感。

ジオフロント――

　最高級レストラン《プレミアム》の地下には、駐車場が広がっていた。

　ノエルは思わず感嘆をもらしてしまう。

「ふぁ～、すごい……雑誌でしか見たことないような高級導力車が……わわっ！　ラインフォルト社のフラグシップスポーツカーに、あっちはヴェルヌ社の限定モデル⁉　ジオフロントに、こんな区画があったなんて……」

「おい、早く歩け！」

　苛立たしげにドゥッチオがスイッチを見せつけ、命令してくる。

　ワジが鼻で笑った。

「ここに魔獣を輸送するためのクルマがあるのかな？」

「……ふん、そういうことだ」

　駐車場の一角に、黒色のトラックが駐まっていた。

　後ろを向けているから目立たないが、前側（フロント）に古戦場のゲートを破ったときの傷が残っている。

「僕たちを連れてくる必要はなかったんじゃない？」

「あいにく、俺は用心深いんだ。爆弾のことを知られてから、お前たちを自由にしたら、どんな対処をされるかわからないからな」

「なるほどね」

「お前ら以外にも、俺たちのことを嗅ぎ回ってる連中がいるようだからな……ベルガード門に向かうまで、念のため人質になってもらうとしよう」

　ドゥッチオ以外の黒ずくめたちが大きめの鞄から機関銃を取り出した。

　三人ともがワジへと銃口を向ける。

「くくく……だが、人質は一人で十分なんでな」

「へぇ、そうかい？　――やってみなよ」

「余裕ぶってんじゃねえぞ、ワジ！　おまえの仲間はホテルの外だろうが！　こんなところに助けに来るやつはいないぜ⁉」

「くくく……」

「あばよ、ワジ！」

　三人が銃の引き金を引こうとする。その前に、ノエルは立ちはだかった。

「やめなさい！　そんなことはさせません！」

　一番驚いたのはワジだった。

「ノエル⁉　どきなよ、彼らは冗談で銃を構えてるわけじゃない」

「あたしだって、冗談でこんなことしてるわけじゃない！　警備隊の一人として、あたしがクロスベル市民を守ります！」

「……僕、不良グループのヘッドなんだけど」

「そんなの関係ないでしょ！　ワジ君が、たとえ不良だとしても、クロスベルの市民であることに違いはないんだから！」

「そう……そうだね」

　ワジが微笑んだような気がしたが――背後のことだったので、その表情を見ることはできなかった。

　ノエルは黒ずくめたちを見据える。

「どうしても人質をひとりにしたいなら、あたしを撃ちなさい！」

「チッ……うるせえ女だ……いいだろう！　そんなに死にたいなら、おまえが先だ‼」

　男たちが引き金に力をこめる。

「くっ……」

　ノエルは目を閉じた。

　最初に浮かんだのはフランと母親の顔――そして、警備隊の制服をまとった亡き父の後ろ姿。

　ソーニャ副司令と、タングラム門の仲間たちの表情。つらい訓練の日々。充実した毎日。

　――初めて警備隊に配属された誇らしい気持ち。あの日は、まだ警察学校の生徒だったフランがお小遣いを奮発してクロスベルで一番大きなケーキを買ってきて、母親と三人では食べきれないと思っていたら、近所の人たちや日曜学校の頃の友だちまでお祝いに来てくれて……

　みんな、ごめん……

　ノエルの体が、背後から引っ張られた。

「ふわっ⁉」

ワジが腰に左腕を回してきて、抱き寄せられるような格好になる。
　彼が右手を、黒ずくめたちへと突き出した。
　静かに宣言する。
「やらせるわけにはいかない……はぁぁぁぁぁ……!!」
　呼気と同時に、魔法とも闘気とも違う、不思議な輝きが彼の体から発せられる。
　まさに銃を撃たんとしていた黒ずくめたちが、呼吸すらも止めてしまったかのように身じろぎもせず立ちつくす。
「ううぅ……な、なんだ……!?」
　それほどの威圧感にもかかわらず、ノエルは温もりさえ感じられる。
「こ、これって……?」
「ぐううぅぅ……ワ、ワジィィィ！　爆弾が、どうなってもいいってのか!?」
　ドゥッチオがスイッチを振り上げた。
　ノエルは悲鳴にも似た声をあげる。
「だめぇぇぇぇぇ!!」
　そのとき、駐車場の奥から駆けてくる足音が響いてきた。
　青と白のジャケットを着た、ブラウンの髪の青年が走ってくるのが見えた。
「あ……ああ……」
　ノエルの視界が涙で歪む。
　彼の仲間――パールグレイの髪の少女と、赤髪の青年。そして、魔導杖(オーバルスタッフ)を構えた少女も一緒だ。
「……ロイドさんっ……!!」
　ノエルが感極まった様子で名前をつぶやいた。
　うなずきを返す。
　エリィが拳銃(ロストキャンベル)を構え、ランディがスタンハルバード(テスタロッサ)を突き出した。
　ティオが導力杖(フローレンティン)を黒色の導力車に向ける。
「ロイドさん、このトラックです。警備隊から捜索要請のあった導力車とデータが一致しました」
「よし、ようやく見つけたな」
　一歩、前に出る。
「ノエル曹長、ワジ……どうしてここにいるのかは、わからないが……どうやら間に合ったみたいだな？」
　ワジがいつものクールな笑みを浮かべて、両手を広げる。
「ナイスタイミングだよ、ロイド」
「はぁ～」
　脱力しかけたノエルだったが、表情を引き締める。



「あっ、ロイドさん！　ホテルに爆弾が！」

「くくく……そういうことだ、特務支援課！　さんざん世話になったがな。この場でまとめて始末してやるぜ！」

　ドゥッチオがスイッチを突き出して叫んだ。

　ティオが得意げに笑みを浮かべる。

「導力通信を使った爆弾ですか。たしかに、物理的には巧妙に隠されてましたが、導力ネットワーク側からは丸見えでしたね」

「な、なに……？」

「レストランのシステムと無関係に追加されていましたから。あれでは、わざわざ爆弾の位置を知らせる案内板を用意したようなものかと」

「……ッ!?」

　ドゥッチオがスイッチを押した。

　カチン、と乾いた音が駐車場の奥へと消えていく。

　爆発音はしなかった。

　何度も何度もスイッチが押される。

「ばかな！　ばかな！　見つけられたとしても簡単には解体できない爆弾のはずだ!!」

　ランディがくたびれた顔して、肩をまわした。

「まあ、火薬の扱いは、それなりに慣れてるんでな。ひさしぶりだったけど、たいして時間はかからなかったぜ？」

「なっ……!?」

　ドゥッチオが絶句し、ワジがヒュウと口笛を鳴らす。

「やるじゃない」

「よかった……本当によかった……」

　声を震わせるノエルの瞳には涙が浮かんでいた。

　ロイドは前に出る。

「古戦場ゲートの器物破損、警備隊による停止命令の無視、ならびに、恐喝事件関与の疑いで、逮捕する！」

「くそがぁ!!」

　ドゥッチオがスイッチを投げ出す。

　そして、トラックの後部ハッチに飛びついた。ロックが外される。

　飛び出してきた黒い影は、二足歩行する巨大なトカゲのような魔獣だった。

　キシャアアアァァァァァァァァァー!!

　咆哮に、ティオが目を見開く。

「気をつけてください！　ブレードファングです！」

　魔獣を放ち、その隙に黒ずくめたちが逃げようとする。

　エリィの銃弾が、その目論見を防いだ。

　遠くから撃ちこまれた一撃が、エレベーターのスイッチを破壊したのだ。

「逃がすものですか！」

「くそっ！　おのれ……こうなったら、まとめて始末してくれる!!」

「うおおおぉぉ～～～!!」

　ドゥッチオたち四人が機関銃を構える。

　魔獣が獰猛な雄叫びをあげ、鋭い牙のならんだ口を開き、飛びかかってきた。

　ロイドは武器（オールラウンダー）で迎え撃つ。

「行くぞ、みんな！」

「わかったわ！」

「ＯＫです！」

「アイサー」

　ノエルとワジも、それぞれが武器を取った。

「援護します！」

「やれやれ……」



　ロイドたちはノエルやワジの支援もあって、魔獣を撃破し、ドゥッチオたちを捕らえることができた。

　犯人たちは床でのびている。

　ロイドは警察本部に連絡を入れて、護送車を回してもらえるよう手配した。

「――はい。よろしくお願いします」

　エリィが拳銃をホルスターにしまい、ランディがスタンハルバードを床につく。

「ま、こんなもんかね」

　ワジが服のほこりを払い落とした。

「それじゃ、ロイド……そろそろ、僕たちは行かせてもらうよ」

「え？　そうなのか？」

「せっかく君に会えたのに、名残惜しいけどね……僕たちは、ただレストランで食事をしていただけさ。そうだろう？」

　話を振られたノエルが、悩んだふうに眉を寄せる。

「うーん、でも警察の調査に協力するべきだと思うし……」

「その格好で、かい？」

「うっ……」

　今さらのように、ノエルはひらひらした自分の格好を見下ろし、赤面する。

　戦闘しているときに、ファーショールもどこかへ行ってしまって、胸元も背中もあらわになっていた。

　私服はトリニティに預けたままだ。

　ロイドは自分のジャケットをノエルに羽織らせた。

「あ……ロ、ロイドさん」

「ノエル曹長が踏みこんでくれてなかったら、彼らに逃げられていたかもしれない。助かったよ」

「えっ、いえ、そんな！　あたし、爆弾に気づいてなくて、あやうく逃がしてしまうところでした。それどころか自分やワジ君の命まで……」
「たしかに、危険はあったかもしれない。でも、一連の事件の犯人を捕らえることができたのは、曹長たちのおかげだと思う」
　ロイドは笑みを浮かべる。
　沈んでいたノエルの表情が雪解けのようにやわらかくなっていった。
「……はい」
「ノエル曹長、ワジ……協力、感謝する。犯人の情報は集めてあるから大丈夫だと思うけど、必要なら後で話を聞きにいかせてもらうよ」
「了解しました、ロイドさん！」
「そのときは、君のためにとっておきのワインを開けるよ。二人っきりで朝まで語り明かそうじゃない」
「ワジ……いろいろ、つっこみどころが多すぎるぞ……」
　がっくりとロイドは肩を落とした。
　みんなが苦笑する。
　ジオフロントの奥のほうから、機械の駆動音が響いてきた。
　鋭敏な感覚を持つティオがつぶやく。
「大型エレベーターの音です。護送車が来たようですね」
「ふふ……先に行くよ。アディオス」
　ワジが非常階段のほうへと足を向ける。
　後についていくノエルが、途中で振り返った。
「ロイドさん……」
「ん？」
「私、明日まで休暇なんです」
「ああ、そう言ってたな」
「ですから……その……」
　エリィとティオが、驚いた顔して見つめる。ランディとワジは苦笑していた。
　輝くような晴れきった笑顔でノエルが敬礼する。
「あたし、明日はゆっくり街を見てみます！　自分が守るものを、この目で！」
「ああ」
「それでは、失礼します！」
　そう言って――
　ドレス姿の警備隊員は、階段へと駆けていくのだった。

第3話　『ノエルの休日』　了



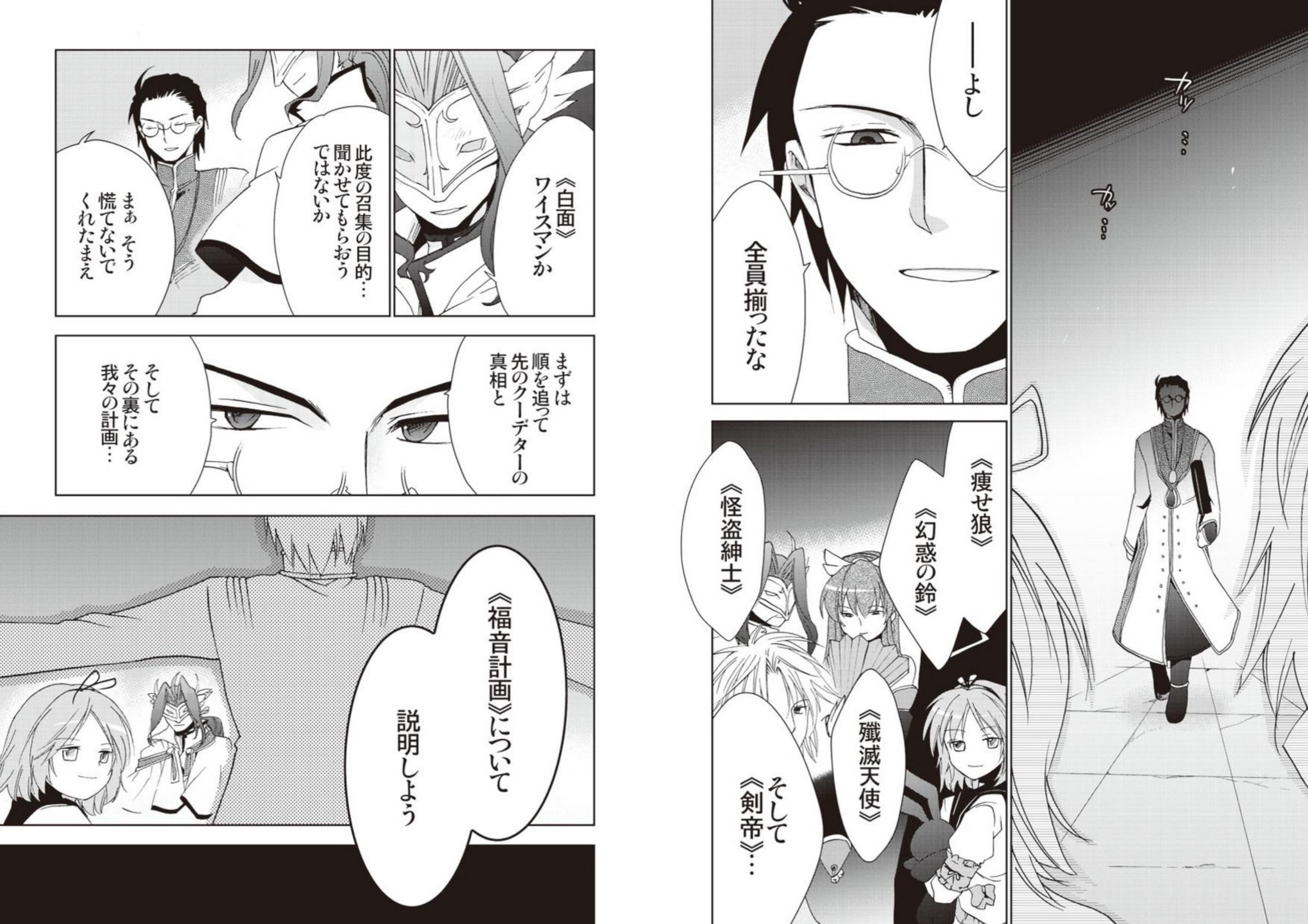

空の軌跡外伝
レーヴェ物語
第十一話
〝計画〟は目的に向かって着々と進んでいた……
脚本 田沢大典
作画 楽時たらひ


…足跡と気配を隠そうともその殺意は消せないものか
《痩せ狼》ヴァルター
——飢えてんだよ


ザッ…
――どうだい
殺り合ってみねぇか
《剣帝》
"死合い"にな
そんな時間はない
他の奴らも到着してるようだしな
そうだろうルシオラ
ブルブラン
フフフ…
ごきげんよう おふた方
隠れていた訳ではないのだが……
まずは 此度召集をかけられたメンバーを観察させていただこうと思ってね


──時に
《剣帝》レオンハルト
聞くところによると例のクーデターに関与していたそうね
そんなあなたと同じ用件で召集されたのは興味深いわ
……
おまたせ
コツ
《殲滅天使》レン
到着したわ
待ってたぞレン
ごきげんようヴァルター


……
なぁに
レディに挨拶も返さないなんて礼儀がなってないわよ
つん
そんな人はお茶会にも呼んであげないんだから
チッ…
……
このふたりは相変わらずだな
レーヴェ
そろそろ指定の時間よ
これからどうすればいいの？
ああ…
カツン…


カッ…
カッ…
――よし
全員揃ったな
《痩せ狼》
《幻惑の鈴》
《怪盗紳士》
《殲滅天使》
そして《剣帝》…
《白面》ワイスマンか
此度の召集の目的…聞かせてもらおうではないか
まぁ そう慌てないでくれたまえ
まずは順を追って先のクーデターの真相と
そしてその裏にある我々の計画…
《福音計画》について
説明しよう

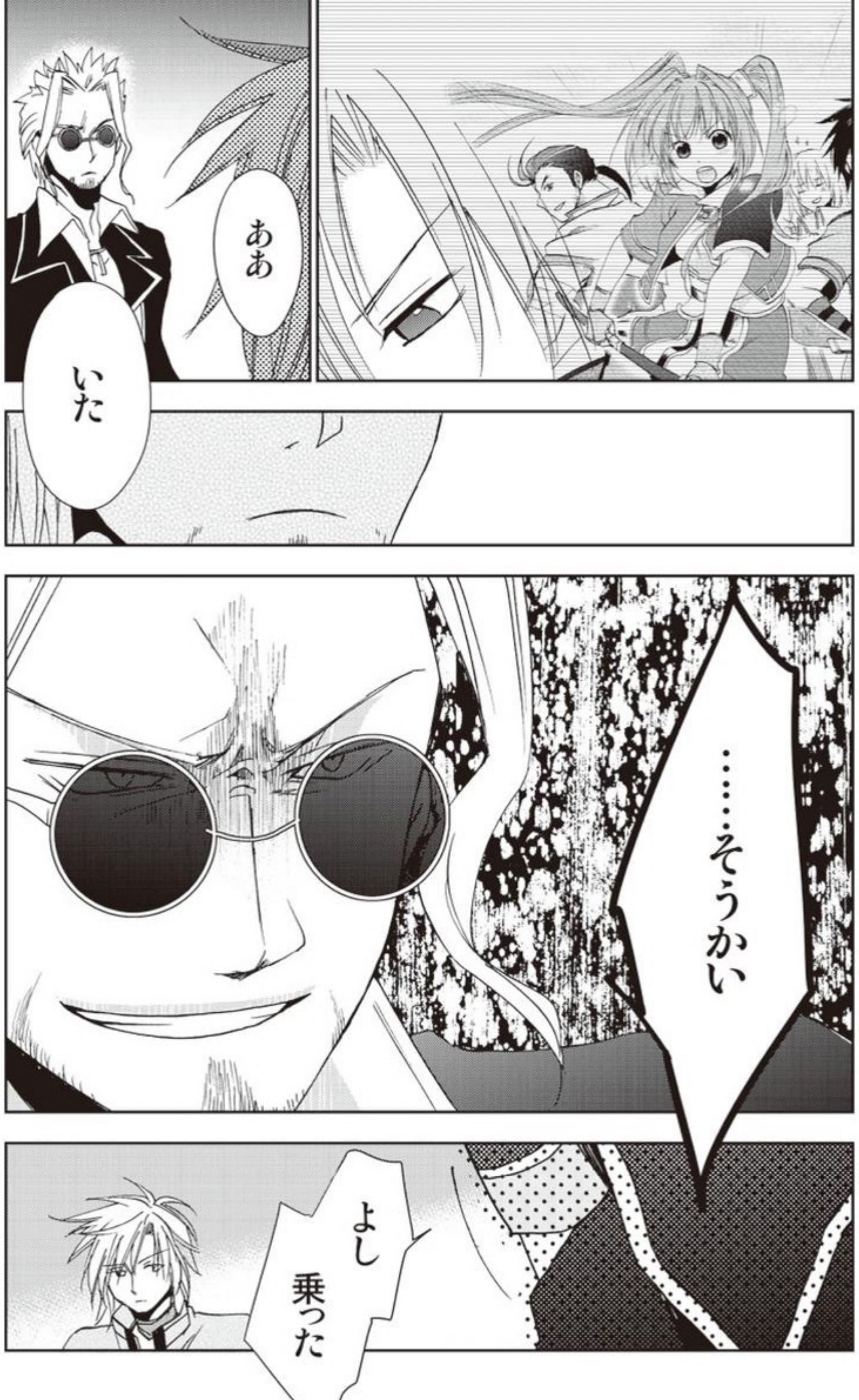

なるほど
つまり現在は《輝く環(オーリオール)》の第二結界が解かれた状態…
という訳ね
そしてその為にクーデターを裏から手引きしていたのが
貴公らということか…
厳密にいえばもうひとり…大役を担った「執行者」がいたが
それについてはこの場には関係ないことだ
……
──さて本題に入ろうか
諸君にはこの道具を使って
リベール国内の各地である実験をしてきてほしい
……
──これは
漆黒の…導力器(オーブメント)？
これは古代遺物(アーティファクト)のひとつ《ゴスペル》
ゴスペル…
このゴスペルが持つ機能と限界の検証
それが実験の目的だ
導力停止現象をはじめ様々なものに干渉を起こす力を持つ
それだけか
惹かれねぇな



俺は辞退させてもらうぜ
…私も
それもいいだろう
君達はあくまで執行者…
結社からの仕事を引き受けるか否かは自身に決定権がある
――しかしだ
例えば
このゴスペルを使って大規模な災害を人為的に起こす
そうすれば遊撃士協会も動くだろう
……



先のクーデターでは遊撃士を筆頭に相当数の手練れが集ったものだ
あの件からまだ日も浅ければ災害を餌に彼らを呼び寄せることも可能ではないか？
またゴスペルの干渉する能力と自身の能力を組み合わせることで
新しい演出を試してみるのも一興だろう
……！
我々の目的はあくまで「ゴスペルの実験」
コト…
どのように使うかは諸君の裁量で考えてくれて構わない
わかったわ

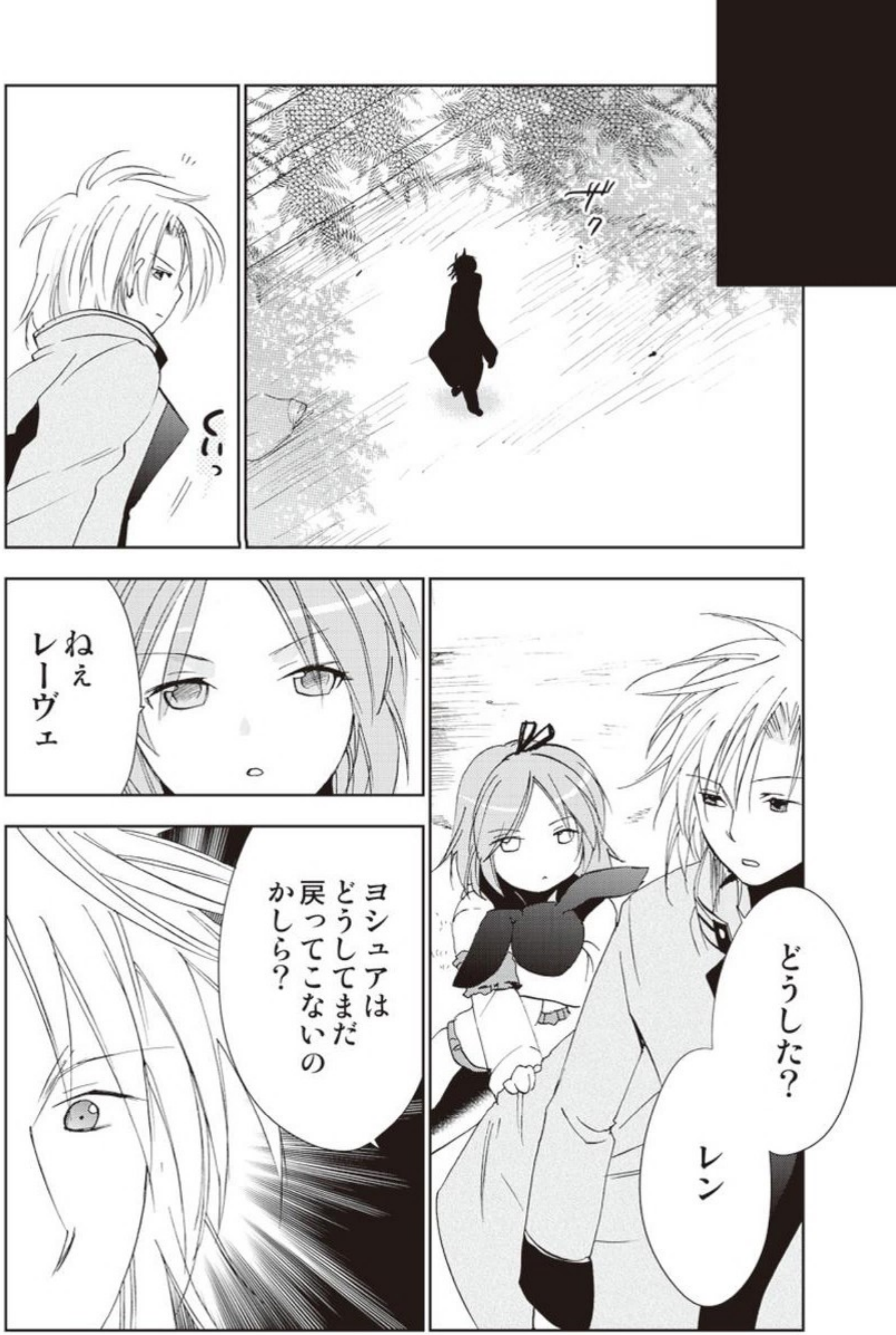

要するにコレを使ってどんな悪戯をしてもいいってことね
レン素敵なこと思いついたわ
私も参加させていただこう
変わった趣のショーができそうだ
では私も…
……
レーヴェ
そのクーデターとやらで楽しく殺れそうな獲物はいたか？

ああ
いた
……そうかい
よし
乗った


……
……
結局全員か
そして…俺も
《剣帝》
君とこのゴスペルはすでに使う先を考えてある
私に同行願おう


…従おう
フフ…
…そう疑うな
君の目的はよく理解している
その意に背くようなことはさせんよ
《福音計画》の成功が君の目的につながる


——では
諸君
……

仮そめの平和に
安心しきった
愚かな民に
覚醒の福音を
鳴らすのだ
健闘を祈る


ザク…
くいっ
ねぇ
レーヴェ
どうした?
レン
ヨシュアはどうしてまだ戻ってこないのかしら?


カンパネルラはもうすぐ戻ってくるって言ってたわ
なのになぜ
ヨシュアは帰ってこないの?
……
さあな
だがこのまま事が運べば…
いずれ俺達の前に姿を現すことになるだろう
……
それは確実だな
しかし
それとヨシュアが結社に戻るかどうかは別の話だ


レン
ヨシュアが帰ってこない理由を知りたいかね？
ええ
ヨシュアが何か理由があってレンのところに戻れないなら
レンがヨシュアを迎えに行くわ
レンはヨシュアが大好きだもの

そうか
では教えてあげよう
ヨシュアが戻ってこないのは
エステルという少女が原因だ
…エステル
そうだ


エステル・ブライト――…
彼女はどうやらヨシュアにとって特別な存在らしい
そのせいでヨシュアはレンの元へ戻ってこれなくなったのだよ
……
…ふうん
なるほどね…

つまりエステルって子がいなくなっちゃえばヨシュアは戻ってくるのね♪
そうだな
――レン
あくまでこれは実験だ むやみに命を奪う必要はないだろう
……わかったわ
……!
でもヨシュアを迎えに行くのはいいでしょう?
――…


やった
ヨシュア どこに かくれんぼ してるのかしら
楽しみだわぁ
ヨシュアは かくれんぼが 上手だけど
今のレンなら すぐに見つけ出しちゃうかも…♪





2011年10月からから好評配信中のWEBラジオ『ティオのファルコムラジオめんどくさいです…でもがんばります』の舞台裏をこっそりお届け♪

ティオのファルコムラジオめんどくさいです…でもがんばります
■配信日　毎週金曜日、公式HP、ランティスラジオ、ニコニコ動画にて更新。
■メインパーソナリティ　水橋かおり（『碧の軌跡』ティオ・プラトー役）　小寺可南子（『ファルコムjdkバンド』ボーカル）
■公式ホームページ　http://www.falcom-radio.com/

第26回-第27回　遠藤綾（『零の軌跡Evolution』エリィ・マクダエル役）

26、27回はエリィ役の遠藤綾さんが２度目のゲストとして登場した。エリィが一番大好きと言ってはばからない水橋さんが今回も大興奮、ゲーム中ではエリィをあえて先頭にせず、一番後ろにすることで、その後姿をただただ眺めるという、マニアックな楽しみ方を披露した。さらに、ゲストパートでは、しおりんの料理とガチともの料理の食べ比べという、恐怖のコーナーが行われたものの、意外としおりんの料理が食べられる出来になっているという、少々期待はずれ（？）な結果に終わってしまった。

▶第26回-第27回の舞台裏◀

前回のリニューアルから行われるようになった、ゲストによる番組提供ナレーション。これは完全にゲストのアドリブで行われているのだが、26回で『零えば買いなさい♪』だったのに対し、27回ではなぜか、『絶対買えよ！』と命令口調に。その変化は遠藤さんのみぞ知る……。

第28回-第29回　石塚運昇（『零の軌跡Evolution』セルゲイ・ロウ役）

28回、29回は、かねてよりリスナーからの希望が多かった特務支援課の課長・セルゲイ役の石塚運昇さんがついにファルコムラジオに初参加。ドラマCDでは演じられていたものの、ゲーム本編への参加は『零えば』が初となったセルゲイについて、熱いトークが繰り広げられた。そして、なによりも印象に残ったのは、石塚さんのゴルフへの情熱だった。そして、『しれん課』では、ついにしおりんの手料理がファンの口に、彼女の料理の腕前があらためて、ある意味すごいレベルに達していることを痛感させられた。

▶第28回-第29回の舞台裏◀

石塚さんがゲームをまったくプレイされない方ということで、なかなかゲーム本編話は語られないかと思われていた今回。しかしふたを開けてみると、スタッフの心配もどこ吹く風、セルゲイのキャラをばっちりと掴んでおり、彼のことを熱く語る石塚さんの姿が印象的だった。





今月のコテガキ

毎週更新とともに発表される、小寺さん直筆の「コテガキ」を少しだけご紹介！





みんな集まれ！ファルコム学園

新久保だいすけ

悪影響



聞きちがい



あの時の貸し



空き地



可愛いは正義



最高のメニュー



謎のレシピ



ボスキャラ達の食卓



自然な結論



リーシャの秘密



最終強化



売り物



悪人



再会と初対面



儀式



英雄伝説 空の軌跡
～リベール王国スナップショット～

著：はせがわみやび

『突撃！ メイベル市長の華麗な一日』（前編）

商業都市ボース・北街区。

昼の強い日差しが通りの石畳を焦がし、道行く人々の足元に小さな影を作っている。

東西に伸びるその通りを、靴音をぺたぺた鳴らして駆けるひとりの少女がいた。

明るい色のブラウンの髪が風になびき、頭の後ろで束ねる黄色いリボンが跳ねている。小さな丸い眼鏡を掛けていた。どこかほんにゃりとしたゆるい雰囲気が漂っていて、せいて走っていてもその印象は変わらない。

と、一軒の店の前で、彼女の首がぐりんと曲がる。

「おおっとぉ」

足をいきなり止めたものだから細い身体が泳いだ。

「っと、とととっと！ あああぁ」

コケそうになったが、かろうじて踏みとどまる。

「はあはあ。と、通り過ぎるところでしたぁ」

ゆるゆるした台詞を吐き、見上げる看板には、『キルシェ』と書かれていた。ボース市の北西にある大きな居酒屋だ。昼はボース市民の食事処として商っている。

切らしていた息を整えつつ彼女は扉を開けて中に入った。

ざわめきに包み込まれる。

二階まで吹き抜けになっている大きな店は昼下がりだというのに客でいっぱいで、肉の焼ける良い匂いと熱気で満ちていた。

天井で五枚羽の飾り風車が、籠もった昼の熱を生ぬるく掻き混ぜている。

お腹がぐーっと鳴る。両手で押さえつつ、彼女は視線を巡らせた。カウンターに座る男の背中を捕まえる。

「センパイ！ ナイアル先輩！」

呼ばれた男が振り返った。

「んぁ？ おまえか、ドロシー。どこへ行ってた。遅っせぇぞ！」

「マーケットですよぅ。ついでに焼きつけを済ませてきちゃいましたから。ほらほら見てください。可愛いです～」

とたた、と走り寄って、ドロシーと呼ばれた少女は肩に提げた鞄から、大きな封筒を取り出す。

「ちょ、ちょっと待て！ それ、写真か？ んなところで広げるなっての！」

「はいはい。だいじょうぶです」

「なわけあるか！」

そう言っても聞かないことは分かっていたので、ナイアルはカウンターの上から慌てて皿を避けてスペースを作る。

「っと、もったいねぇ」

「意地汚いですよぅ、先輩。そんな指についたスープを舐めるなんて」

「誰のせいだっつーの！」

「そんなことはどうでもいいんです」

「よくねぇ！ てか、話を聞け！」

「ほらほら。ボースマーケットですよ！ このコってば、すっごくエレガントなコですよねぇ」

ドロシーが封筒から写真を何枚も取り出して並べ始めた。

狭いカウンターの上がいっぱいになる。

相変わらずの写真バカだ。ナイアルは思った。

いや——。

ナイアルは並べられた写真を見て目を瞠る。

「こいつは……！」

バカと紙一重のほうか。

「どーですか、先輩？」

「どうやって撮った……？」

「えっ。ふつーですよ。ぐるっと回って」

にっこり微笑んで言った。

それらは、ボースマーケットを撮った写真だった。

ボースマーケットは、商業都市ボースを象徴する巨大な百貨店だ。街の北の中心に聳え立ち、百貨の名の通り様々な店がひとつの建物に入っている。

その巨大さは、市の北街区の四分の一ほども占めると言えばわかるだろう。

並べられた写真はボースマーケットをぐるっと外から回って撮られたものだった。

ハガキほどの大きさの十枚以上の写真を互いに繋がるように並べているのだけれど、驚いたことにくっつけると切れ目がわからない。一枚一枚の写真が左右でぴったり合わさっていて、建物の外周三六〇度に渡って映されていた。

少しずつ重なるように撮るならできるだろう。あるいは東西南北のそれぞれ正面から撮っただけならば、それもわかる。

だが、これは……。

「おまえ、三脚とか使ってなかったよな？」

「はい？　はい、そうですけど」

きょとんとした顔つきでドロシーが答える。

──それで、このパノラマ写真を撮ってみせたってのかよ！

ナイアルは内心で舌を巻いた。

しかも、東側から撮った写真も西から撮った写真も、きれいに日差しを受けている。ということは、こいつは建物いっこに丸一日を費やして撮りあげたってことだ。

目の前の娘、ドロシー・ハイアットは、まだ二十になったばかりだというのに、リベール通信社のカメラマンとして雇われている。それだけの腕がある。オーバルカメラの天才ってやつなのだ。

「マーケットさんは、背が高いだけじゃぁなくて、お洒落さんで、とっても可愛いコですよ～」

とドロシーが言った。彼女の目にはどうやら建物や風景がひとりひとりの人間と同じ個性豊かな表情を浮かべて見えているらしい。

「うまく撮れているじゃないか。ドロシーくんは写真が上手なんだねえ」

カウンターの向こうから『キルシェ』の主人も褒めた。注文をとって、ドロシーの前にもレッドテールスープを置く。

「ありがとうございます～。えへへ」

照れて頭の後ろを掻く仕草はとても天才には見えなかったが。

「っと。そうでした。それで、先輩のほうはどうだったんですかぁ？」

ドロシーの問いかけにナイアルの表情が変わる。苦虫を噛んだような顔になった。

「失敗だ」

「えー？」

「インタビューを受けている時間はない、とさ。取りつく島もねえ」

一方のナイアルのほうはリベール通信社に雇われている記者である。雇用されているのだから社の方針には従わなければならなくて──具体的に言えば、この市の市長へのインタビューを敢行することを命じられていた。

のだけれど、あっさりと断られ……。

「市長さんですもんねえ。お忙しいんですねー」

「そりゃ、そうだろうが……。せめて会うだけでもできりゃよかったんだがな」

あの市長つきのメイドは優秀すぎる。まるで鉄の女だ。会いたいというナイアルの依頼をあっさりと切って捨てて畳んでつき返してきた。

「それとも、また頼み方がまずかったんですか？」

「ぐっ！　……おまえな」

悪気はないのはわかるのだが痛いところを突きやがる。

「先輩、有名人の記事とか苦手ですもんねぇ」

「言うんじゃねえよ！」

たとえ事実でもだ。

ナイアルはあまり人間づき合いが得意でない。コネを操ることもお世辞を言うことも苦手なナイアルにとって、有名人のゴシップ記事ほど苦手なものはなかった。

本音を言えば、事件だ。もっと大きな事件を追いたい。記事を書きたい。そう思う。

だが、インタビューを取らねば社から報酬が出ない。

ミラが無ければ次の街に行くこともできはしない。ここで足止めだ。それどころか、ホテル代だっていつまで持つか。このままじゃ数日後には青空を天幕にした素敵なサバイバルライフが始まることになる。

世の中、万事ミラ次第……せつねぇ。

「消えた飛行客船の行方もまだ突きとめてねえってのに。くそっ！」

拳で膝を叩く。

「仕方ないですねー」

「あのな。おまえも一蓮托生だってこと忘れるなよ？　記事が取れなけりゃ、写真の経費は落ちないからなっ」

「ええっ!?　それは横暴ですよぅ」

「当たり前だっつーの、このトンチキ娘！」

「ううん。困りましたねー。けっこう、いっぱい撮ってしまいました。これからの焼きつけ代だけでも、ええと……。とにかくいっぱい掛かりそうなのに」

うーんうーんと唸るドロシーを横目で見ながらナイアルはカウンターに頬杖をついた。

さて、どうしたもんかな、とつぶやく。

「あ、そーいえば……」

「うん？」

「その市長さんですけど。マーケットで聞いた話では、よくひとりきりでお店を視察しているって」

「ひとりきりで、だと？　市長が？」

まさかと思ったのだ。ボースは充分都会だ。王都グランセ

ルに比べれば小さいとはいえ、この街で市長が供も連れずに歩き回ってるって？
「ああ、メイベル市長はそういう方ですよ」
　答えが意外なところから返ってくる。カウンターの向こうで店主が皿を乾いた布でこすりながら言ってきた。
「マジか？」
「はい。まだお若いのに、前の市長であったお父様を亡くしてから立派に市長の職を継いでらして……。その商才というか、経営の手腕は父親をしのぐとのもっぱらの噂です」
「ほー。すごいんだな」
　思わず、という感じで漏らしてしまったひとことだったけれど、自らの市の市長を褒められてよほどうれしかったのか、彼は延々とメイベル市長がいかに素晴らしいかについて語りだした。
　曰く、商業都市ボースが近年著しく貿易利益をあげだしたのは市長がきめ細やかに貿易品を監視しているおかげである。安く買って高く売る。商売の基本を忠実に実行しているだけなのだが、その簡単なことが実は難しい。
　メイベル市長はボースと他国の間で売り買いされているあらゆる品目について常に目を光らせているのだという。
　店長は延々と語り続けた。
　さらに市の経済の中心であるボースマーケットは、メイベル市長自身がオーナーであることもあって、自ら視察を繰り返している、と。
「オーナー……経営者だって？　あのでかい店の、か」
　店主に頷かれてナイアルは言葉を失う。
「メイベル市長って、まだ若かったよな？」
「確か、二十一とか」
「に……にじゅういちぃ？」
　こいつとたいして変わらない……だと？
「な、なんですか、先輩。その目はいったいなんですかぁ」
　思わず振った視線の先で、ドロシーが走って乱れた髪をなでつけ、リボンを引っ張って整えていた。眼鏡の弦を中指で押し上げてお澄まし顔をしてみせる。また無駄なことを。そんなんでしっかり者に見えたら苦労はない。
　しかし……。二十一で市長を勤めるだけでも信じられないが、その上で街で一番でかい商業施設ひとつの経営者……だと？
「すげえ、な……」
「だろう。しかも、それだけじゃない」
「ほう」
「美人なんだ」
「…………だから、どうしてそこで落ち込んでやがる、ドロシー」
「しっかり者で美人さんなんてずるいです……」
「おまえ、今までそんな気にしてたことねーだろ⁉」
「でもなんとなく、ですねぇ」
「あのなぁ。カメラマンはおまえしかいねーんだから、しっかりしてくれよな」
「はぁ……はい」
　――ま、放っておくか。いつもみたいにそのうち立ち直るだろうし。
「なるほどな。市長にとっちゃ、マーケットの視察も仕事というわけか……」
　そのとき、ナイアルの頭にひとつのアイデアが閃いた。
「そうか……ひとりで視察、ね……」
　よし、と腹をくくる。
　インタビューを申し込んで断られた以上、正攻法では市長の記事は書けない。ならば、ボースマーケットに潜入して、その視察の様子ってやつを見てやろう。
　まるでゴシップ記者のようだが、背に腹は換えられない。
　記事のタイトルも思いついた。
『突撃！　メイベル市長の華麗な一日』
　まるで大衆雑誌の見出しのようだが、それくらいのほうが割り切って書ける！　……気がした。たぶん。
　おし、とナイアルは気合を入れる。残っていた真っ赤なスープを飲み干すと、さっそく取材の段取りを考え始める。
「ドロシー」
「はい。なんですか、先輩？」
　このときナイアルは、自分の次のひとことが思わぬ波紋をもたらすなどとは思っていなかった。
「おまえ、こっそり盗み撮りってできるか？」
　あくまでも気軽に、カメラの天才に聞いただけのつもりだった。
「……へ？」
　オーバルカメラの手入れを始めていたドロシーが振り返る。困惑の表情のまま彼女は固まっていた。

2.

「困りましたねー」
　真夜中近く。フリーデンホテルの自らの部屋で、焼きつけた写真の整理をしながら、ドロシーは先ほどから何度も同じ台詞を繰り返していた。
「大丈夫でしょうかぁ。はあ。っと、これは可愛いコですから、こっち」
　一枚の写真を机の右手に重ねる。ルーアンの街の時計台を写したものだ。

「これはかっこいいコだから、こっち、っと」

左側に重ねたのは岬の灯台の写真で、右上隅の空に一羽のカモメが映りこんでいる。

写真の差は余人にはさっぱりわからないものの、ドロシーには明らかなようで、独自の基準で迷うことなく振り分けていく。

大量の写真を仕分け終わると、それぞれを封筒に入れて整理する。ひととおりの作業を済ませてから、ドロシーはふたたびため息をついた。

「困りました……」

何度目になるかわからない呟きを繰り返す。

ナイアル先輩が名物市長の記事を欲しがっているのは理解している。書かないと報酬がもらえない、わけだ。ドロシーにとっても困ることで、なにしろ写真というのはそれなりにミラがかかる。

けれど……。

自分に隠し撮りなんてできるだろうか？

先輩は言っていた。「ゴシップが書きたいわけじゃねえ。紙面に載せる前にちゃんと許可は取る」、と。

あくまで市民の目でありのままの市長の働きぶりを見守り、記事にしたいだけだ、と。言いつつも目が泳いでいたから、ナイアル先輩にとっても不本意で後ろめたさがあるようだけど……。

メイベル市長の振る舞いを自然に撮ってくれればいい、と言っていたのだ。

けど、問題はそこではない。

「わたし、静かに写真なんて撮れるんでしょうか？」

自問自答してしまう。

ドロシー・ハイアットはカメラを構えたときに黙っていた記憶がない。

というか、ありていにいって——うるさい。

と、しばしば言われる。

「でも、ご機嫌よくしてもらわないと、よい顔はしてくれませんしねぇ」

モデルが、静かに佇む木々であろうと、物言わぬ古代遺跡であろうと、よい気分になってもらってこそ、素敵な表情を撮ることができる。ドロシーには当たり前のことなのだけれど、あまり周囲の理解は得られていない。

それでも、いつも精一杯もてなしてから、シャッターを切っている。

もはや自分がそんなことをしているなんて意識にさえ昇らないほどに。

だから——こっそりと、なんて……。

「できるんでしょうかぁ？　はあ」

明日は早い。ナイアル先輩と待ち合わせた時刻は日の出よりも前だった。

とまどいを抱えたまま眠りにつき——。

夜が明ける少し前にドロシーは目が覚めた。

胸の内の不安は倍の大きさに膨れていた。

3.

綺麗だぁ、とドロシーはその屋敷を見て思った。

メイベル市長の暮らす邸宅は、個人の住む建物としては、おそらくボース市でもっとも大きいもののひとつだ。

二階建てで、南の棟だけは窓を見る限り三階まで存在する。

壁一面が白い石を組み上げてできており、昇って間もない柔らかい朝の光が、壁を薔薇色に染めていた。まるで頬を赤らめている貴婦人のように見えた。

張り出し窓は大きなガラス入り。きらきらと朝日に光っている。

今すぐにシャッターを切りたい。

ドロシーは思ってしまう。うずうずする。

「ダメだ」

「まだ何も言ってないですよぅ」

「だったらカメラを降ろせってのっ！」

「はっ！　つい」

いけない。いつの間にか構えていた。

ドロシーとナイアルは市長宅の門が見通せる通りの角に潜んでいた。

日の出前からココに突っ立っているから、そろそろ足が痛くなってきている。お腹も空いてきた。眠気だって——

「ふわわわ～」

「声を出すなっつーの！」

「んぐっ……うう、ふぁぁああ。む、むりふぇふよぉ」

それでも欠伸を噛み殺そうとしたら、目尻に涙が浮いた

「おまえな。今日の獲物は建物じゃねえって言ってるだろ！」

ぺしっ、と頭をはたかれる。

目じりに浮いた涙が零れた。

「女の子の頭をぽんぽん叩かないでくださいよぅ」

「おれは後輩には厳しい先輩でありたいと思ってるんでな。……しかし、動きがねえな」

「何がですかぁ？」

「おかしい。いくらまだ朝早いからって、市庁舎のほうに向かうにしても、お忍びで視察に出るにしても、そろそろ動きがあっていいはずだ。おい、なんか見えるか？」

「わたしのカメラは遠眼鏡ではないのですけどぉ」

ぎろっと睨まれて、ドロシーはカメラを抱えなおした。

オーバルカメラは小さくても、導力革命以後の最新技術が詰まった精密機械だ。レンズの部分にだけは古い巧みの技が使われているけれど、内部装置や記録媒体には七耀石を組み込んだ最新の結晶回路が使われている。

鞄から望遠用の交換レンズを取り出してカメラにセット。屋敷にレンズを向け、遊撃士の使う導力器に似た（ただし、大きさは五分の一ほど）円盤を指先でなぞりあげれば、カメラの後ろにある投影板にレンズを通した画像が現れ、ピントを結んだ。

ドロシーは、機械だけに頼るのは好きではなくて、ファインダー越しにマニュアルでセッティングするほうが好みなのだが、今は先輩に見せなければならないから仕方ない。

投影板に、一階のガラス窓越しの室内の様子を写しとる。ピントOK、絞りもチェック。ん。ばっちりだ。このままシャッターを切れば――。

「っと、撮影するのではありませんでした」

「なんか見えるか？」

「こんな感じですけど」

投影板に映し出された画像をロックしてからナイアルに見せる。記憶子には保存してないから、ロックを解除すれば映像は消えてしまうが、今は問題ない。

食堂らしきところで屋敷の使用人たちが集まっている光景が写っている。

こんなことをしていると、まるで遊撃士か街の自警団の張り込み捜査みたいだ。

「片づけてやがるな」

「そういえば、のんびりした感じですねー」

互いに笑い合いながら、テーブルを拭いたり、食器を抱え持ったり、すっかり朝食後のひとときという感じ……。

「あれ？　あれれ？　そろそろ朝食のお時間というところだと思うのですが」

「……さては！」

顔色を変えたナイアルが角から飛び出すと、屋敷の門柱に飛びついた。

呼び鈴を鳴らしまくる。

険のある表情を浮かべ、ひとりの若いメイドが出てきた。不機嫌そう。美人が怒るとちょっとおっかない。

「またあなたですか。記者ナイアル・バーンズ殿。メイベル様へのインタビューは昨日お断りしたはずですが」

「市長は？」

「ご用件は？」

「いるのか！　いねーのか！」

「ご用件は？　どのようなご用件でしょう。アポイントメン

トはお済みですか？」

――すっごい、このひと。

ドロシーは内心でだらだらと冷や汗を流しまくりつつ一歩引いて見守ってしまう。

心臓がドキドキしていた。

ナイアル先輩は、決して恐ろしげな風貌をしているわけではない。目つきこそちょっと怖いけれど、体格はふつう、というかやや細めだし、筋肉だってついてない。

安売りで買ったよれよれのシャツを胸元をだらしなく開けて、いつもネクタイをゆるく巻いている、一歩間違えれば失業中のおじ――お兄さんみたいななりをしているだけのふつうの青年だ。

が、だからといって、目の前のメイドさんから見れば、年上の男の人なわけで……。こうまでクールにあしらえるものだろうか。

ナイアル先輩を足下を歩く蟻か羽虫のような態度できっぱりはっきり応対してる。

「だから、家にいるのかって聞いている！」

先輩も負けてなかった。

まだまだしぶとく粘っていた。

ジャーナリストの鑑かも。ドロシーは素直にそう思い、ふと気づいた。

あれ？

――いま、このひと、すこし笑いませんでしたか？

頭に血を昇らせているナイアル先輩はまったく気づかなかったようだが、ほんの少しだけ何かを企んでいるかのような笑みがメイドの口許に浮かんだ、ような。

「市長は、もうお出かけになられました」

それまで頑なにナイアルの問いかけを無視していたメイドが言った。

「どこへ！」

「さあ――」

余計なことは話さない口数少ないメイドが言った。

「ただ……本日は公務は入っておりません」

言外に、市庁舎には行ってないと匂わせた。ナイアルが「マーケットか！」と短く叫ぶ。

「出遅れたか。行くぞ、ドロシー！」

「は、はいですぅ！」

駆け出した先輩を追って、新米カメラマンは鞄を抱えなおして走り出した。

ふたりの背中を見送ったメイドが「では、こちらも準備を始めましょうか」と小声で呟いたが――。

午後の風にさらわれたその声が、ナイアルとドロシーの耳

にまで届くことはなかった。

4.

ボースマーケットは四方を大通りに囲まれた、上から見ればほぼ真四角な形をした建物だ。
通りに沿った白亜の壁沿いには季節の花を植えたプランターが置かれ、道行く人々の目を楽しませていた。
マーケット西側の入り口。
ドロシーとともに佇み、ナイアルは建物を見上げる。
「ったく、こんなに高くつくる必要があったのかねぇ」
市の北側の四分の一ほども占める広さがあるのだから、それだけで充分な店が入ることができる。事実、中は吹き抜けの平屋で、二階さえない。
それなのに、屋根は三階ほどの高さにある。
「中に噴水までありますから」
「いやそれおかしいだろ。そこまで吹きあがらねえぞ!?」
ドロシーの言葉に思わず突っ込む。
百貨店の中央にちょっとした広場と噴水があるというのは、確かにすごいことだとは思うが、だからといってこれだけの高さは必要ないはずだ。
「薬局も青果店も金物屋も入ってますよー」
「だからそーいう問題じゃ――ええい、入るぞ！」
出窓のように半円をした形の正面のガラス扉は、真ん中から左右へと回るように開く面白い構造をしていて、しかも人を感知して自動で動く。こんなところにも、導力革命の成果を見てとることができた。きっと、導力器を使っている。
西から入ると、右手すぐには洋服屋、左手は雑貨屋が商いをしている。そこを皮切りに、店内のずっと奥まで異なる店が延々と連なり様々な品々を並べていて壮観のひとことだった。
つまり、ここは「ボース市の市場」なわけだ。『ボースマーケット』はひとつの店の名前ではなく、建物につけられた名前ということ。メイベル市長が持っている権利というのは、この建物への出店を許可する権利であり、彼女は市場の管理人である。
「ほんとにたくさんのものを売ってますよねぇ。それに人がいっぱい」
「キョロキョロしてんなよ、首が痛くなるぞ！」
「ですよねー」
真顔で頷かれた。
……痛めたことあるのかよ、こいつ。
しかし――この中から、市長を探すのか……。
しかもお忍びでボースマーケットに来ている、というのは

当て推量であって確証はないわけだった。
一瞬、やめちまおうかな、と弱気になるが、ナイアルはかろうじて思いとどまる。一文無しで野宿は嫌だったし……。
――大体、おれはそれでもかろうじて耐えられるかもしれねぇが。
ちらりと横に立つ相棒を見る。
――こいつは無理だろうしなぁ。
「先輩、どこから捜しましょう?」
「あー」
盗み見たとたんにこちらに顔を向けられて、ぎくりとしてしまう。ほんの少しだけうろたえた。相変わらず人の視線には聡いやつだ。カメラマンの習性なんだろうか。
「とりあえず、ぐるっと回ってみる」
「はい～」
ゆるい返答に、だいじょうぶか？　と不安になりつつ、ナイアルは店内をゆっくりと見て回り始め、しばらくして気づいた。
そういえばまだ市長の顔を知らなかった。
――意味ねえじゃねえかよ！
図書館か市庁舎にでもよって、紳士録（フーズ・フー）でも見ておくのだった！
「あれ、すごいですねぇ」
ドロシーの声にナイアルは顔をあげる。
ほらほらと指差すほうを見ると、金物屋の店先だった。金物だけでなく、皿や鍋などの陶磁器も売っているらしい。平台があって、『特売』と書かれた貼り紙とともに白い簡素な皿がうず高く積まれていた。
「てか、積みすぎだろ、おい！」
視線より高いところに一番上の皿がある。ナイアルが手をいっぱいに伸ばしてかろうじて届くかどうかというところだ。
なんだかゆらゆらと揺れているような気さえする。
「おいおいおい。やばくねぇか、あれ」
しかも、恰幅のいい女性がひとり、目を輝かせながら「安いわぁ」と言いつつ、強引に白い皿の塔の中ほどから一枚抜き取ろうと――って、無茶だ、それは！
「せせ、先輩！」
「馬鹿が！」
――くそっ、派手に揺れてやがる！
客にぶつかりながらも駆け出したが、とうてい間に合いそうもない。
「だめですよ」
涼やかな声とともに、揺れていた皿の塔がぴたりと静まる。
ナイアルの足が止まった。

人波の向こうに、皿の塔を支える女性の姿が見えた。

栗色の髪をした二十歳ほどの少女だった。リボンの色と同じ赤い上着を羽織り、胸元を大きな青い宝石で留めている。ピンク色の内服にはひらひらがついていて、なんだかとても高そうだ。

「あぶないですから、こういうときは店員を遠慮なく呼んでくださいね」

そう言いながら、皿を抜き取ろうとした女性ににこりと微笑む。不満げな顔つきに一瞬だけなったものの、彼女は自分を咎めた相手が誰だかわかるにつれて表情を変えた。

「し、市長！」

「はい」

「もも、申し訳ありません！　あのそのあの……」

「いいえ。あなたにお怪我がなくてなによりですわ」

——市長、だと!?

数歩前でかろうじて止まったナイアルは慌てて陳列棚の影に潜んだ。「せ、先輩」と声をかけながら近づいてきたドロシーの頭を抑えこんで自分と同様に隠れさせる。

「むぎゅ」

「声を出すなっつーの！」

——あれが、ボース市の市長、メイベルか。

本当に若かった。しかも美人だった。

メイベル市長は店員を呼んで客の相手をさせると、そのまま自分は店主を店の裏まで連れて行って、危険な皿の塔をやめるように言い聞かせた。

「この並べ方は危険です。お客さまが怪我する可能性があるわ。改善するように」

柔らかい声だが、有無を言わせないきっぱりとした物言いに、金物屋の主人が平謝りする。

「あなたがいつも安い品を苦労して仕入れてきてくれるのは知っています。だからこそ、こんなことでお店の評判を落としてはいけないわ。ね？」

「あ、ありがとうございます！」

大声の持ち主の店主はそう言いながら、ぺこぺこ頭を下げた。

あれだけ声を張り上げてしまっては、せっかくメイベルがバックヤードに連れて行っても意味がなくなってしまう……。

それでも誰ひとり嫌な思いをさせることなく収めてしまった市長の行動にナイアルは舌を巻いた。本音では二十一の小娘にどれほどのことができるかと——侮っていなかったと言えば嘘になる。

「ドロシー。撮ったか？」

「んーんーんー」

「っと！　わりぃ」

しまった。口を塞いで棚の隅に押し込んだのは自分だった。忘れてた。

「んふぁぁ！　はぁはぁはぁ。ひ、ひどいですよぅ、先輩。はぁ。苦しかった」

「いいから、声を抑えろっての。カメラだ、カメラ。何枚か、撮っとけ！」

「は、はい」

「静かにだぞ！」

「う、ひゃい！　わわ、わっかりましゃ……まひた」

きゅっと口を結び、かろうじて半身が見えている市長へとカメラを構える。もちろん棚の陰からだ。口を開いては閉じ、開いては閉じた末に（声を出さないように葛藤してるのだろう）、シャッターを押し込み、何枚か写真に収めた。

バックヤードから出てきたメイベルは、そのまま店の巡回を続けるようだった。ナイアルもドロシーと共に隠れつつ後をつける。

金物屋から雑貨店へと移動。市長はそこでまた足を止めた。

書棚の前を行ったり来たり繰り返している青年がいて、困った顔をしたままチラチラと店主の方を見ている。

探し物をしているようだが、あいにく店が混んでいて、主のほうは気づかない。

メイベル市長がそっと近づき、青年に声をかけた。

「本をお探し？」

声をかけられた青年は市長の顔を知らないようだった。旅行客らしく、話しているうちに、商売を学ぶために商業都市ボースにやってきたとわかる。

「それでしたら、お勧めはこれかしら」

書棚から一冊の本を抜き出して見せる。

軽く本の説明をしてから、それ以外にも数冊を選んでみせた。

——まさか棚の本をぜんぶ覚えてるわけじゃねーよな？

それは無いだろうとは思ったが、淀みなく選択するってことは、恐らくは自分も学ぶときに使った本なのだろう。経済発展を続けるボースの敏腕市長の推薦本とも気づかずに、青年は感謝の言葉を述べて売り場に向かった。

「はぁぁ、なんだかすごい人ですよぅ」

「まあな。って、おい。今のはちゃんと撮ったか？」

「はぁ。まあ、その……撮りました、けど」

「けどなんだよ」

「なんか……ヘンなんです、ケド」

「何が変なんだ？」

「んー。……なんか、です」

要領を得ないドロシーの返事にナイアルは訝しむ。

だが、問い正している余裕はなかったのだ。メイベル市長がふたたび視察を再開させてしまっていた。
ドロシーの言うことも気にはなったが、混雑するマーケットの中で見失ったら、再度見つけるのは難しいに違いない。
「くそっ！　追うぞ！」

5.

ドロシーは苦労していた。
いつもと違うやり方でカメラを構えているせいなのか。それとも何か他に理由があるのか。全然うまく撮れない。撮れる気もしない。
――こんなにうまくいかないのは何故なんでしょう？
あまり人物写真というのは撮らないドロシーだけれど、決して苦手というわけではなかった、はずだ。
人も自然も静物も変わりはしない。
よい――そのコらしい素敵な表情をしていたら、それをカメラに収めるだけ。
の、はずなんだけど……。
今ファインダー越しに見えているのは、ボースの市長、メイベルの姿だった。
財布を落とした客がいて、目ざとく落ちる瞬間を見たメイベルが拾って追いかけて、まさに渡すところ。
ちょっと走って追ったのでドロシーは息が切れている。
深呼吸してからファインダーを覗き込んだ。
「あ……」
まただ。
ドロシーがカメラを構える。ファインダー越しに彼女の姿を捉えて、ピントを合わせ、絞りを決めて、まさにシャッターを押し込もうとしたその瞬間。
すっとメイベルが顔を背けてしまった。
これでは撮れない。
いや、撮ってもいいのだけれど、それでは新聞には載せられないだろう。後ろ向きの肖像写真じゃしょうがない。仕方なしに再び集中して次の機会を待つ。
市長は半身にしていた身体を回転させ、一歩、二歩立つ位置を変えてから、顔をこちらに向けた。
――ああん、もう！　なんでですかぁ！
絶好のチャンスなのだけれど、前の人、邪魔です！
けれども、財布を渡す瞬間はそのときしかなくて、仕方なしにドロシーはシャッターを切った。
「あううう」
失敗だ。表情はばっちり撮れたけれど、トリミングをしないかぎり、余計なものまで写ってしまっている。

どういうことだろう？
こんな失敗は今までした経験がない。
覚えがない。
いつだって写すべき相手にあれこれ話しかけているうちに「いちばんいい瞬間」が訪れてくれた。その瞬間にシャッターを押すだけでばっちりの写真が撮れたのに……。
迷子が泣いていた。
泣き声に反応したのはやっぱりメイベルのほうが先で、男の子に駆け寄ったメイベルはあやしつつ手を繋いで両親を探し始めた。ナイアルと共にドロシーは後をつけるしかなかった。ちょっと心配しつつ。
でもすぐに親が見つかって、ほっとしたドロシーはカメラを構えた。
物陰から様子を伺っているうちに、再び違和感がくる。
――あれれ？
なんだろう、あの人。
今度は市長の向こう側に妙な人がいる。
妙、と思ったのは、その男が何も見ていなかったからだ。
ファインダー越しでもドロシーには彼の視線が近くの商品のどれも捉えていないのがわかる。
――なんであの人、店の奥なんて見ているのでしょう？
レンズを動かして、ピントを背後の男に合わせているうちにドロシーは気づいた。男の着ている服がおかしい。
「可愛くないですよぅ」
と、思わず呟いていた。
センスの問題ではない。ドロシーにはわかる。あの服はあの男の趣味ではない。自分で選んだ服じゃなくて、でも、どうしてそんな服をわざわざ着て、洋服屋なんて見ているのだろう？
「おい！　撮ったのか？」
先輩の声に我に返る。
「はは、はい！」
シャッターを切ってからドロシーは気づいた。しまった、ピントがそのままだ！
――何やってるんだ、わたし！
とんでもない失態だった。慌ててピントを市長に合わせなおしてから撮る。
けれど、そのときにはもうメイベル市長はかしこまった顔になって感謝して頭を下げる夫婦に向かって、子どもの手を離してはいけませんよ、と諭していた。
その前の、子どもに「よかったね」と微笑みかけたときのほうが、絶対いい顔だったのに！
ずーんと落ち込んでしまう。

「あれぇ、どうしたの、ドロシー」

聞き覚えのある声に顔をあげた。

「あ……エステルちゃん……」

遊撃士のコンビ、エステルとヨシュアだ。

「マーケットでお仕事？」

「あ、うん。そうなんだ～」

ニコニコした顔のエステルに負けじとドロシーもなんとか笑みを作る。さすがにこのふたりの前で落ち込んだ顔なんて見せられない。

長い髪を左右でおさげにした少女がエステル・ブライト。王国では珍しい漆黒の髪と琥珀色の瞳を持つヨシュアはその弟だという。ふたりともドロシーよりも年下なのだ。

少し前に知り合ったこの遊撃士コンビは、行方不明の父親を探すために王国内を旅している。そんな彼らが元気なのに、自分が落ち込んでいるところは見せられない。

「そっかー。お仕事、大変みたいね」

と言って、エステルがにこっと微笑む。

「いえいえ～。それよりエステルちゃんたちは……？」

「僕たちは買い出しです」

「ちょっとハーケン門のほうまで行かなくちゃいけなくなってさ！　ほら旅をするにはそれなりの支度がいるじゃない？」

「でも、そのお菓子は余計だと思うけど」

愛用の棍を背にした遊撃士の少女に向かって、ヨシュアが冷静に突っ込んだ。エステルは左右の手にふわふわのカステラを持っている。

「ふっふっふ、ヨシュア、このエステルさんがいいことを教えてあげるわ」

「……一体どうしたのさ」

「いい？　この世にはね、『腹八分目じゃ戦えない』ってことわざがあるのよ！」

「そんなことわざ無いと思うんだけど」

「いいの！　あるったらあるの！　なかったらつけておいて！」

「つけが利くのか……」

「これは女の子の真理なんだから！」

「はぁ……君の気持ちも分からなくはないけど、僕たち遊撃士にとって食べ過ぎは危険じゃないかな？」

「き――きけん？」

「命の危険ってこと」

「な、なによ。それってどういう……」

「戦いのときの立ち回りに支障が出る、かもしれないだろ？」

ヨシュアのまわりくどい言い回しに気づいたのはドロシーのほうが先だった。思わず口にしてしまった。

「ああ、つまりエステルちゃんがカステラの食べ過ぎでふっくらモチモチしちゃうってことか～。それはそれで可愛いかもですねぇ」

「あ、あんですってぇ～～～！」

ヨシュアに向かって手を振りあげ、その手がカステラを握り締めていることに気づいて手を下ろした。

「僕は言ってないけど」

「ううう～～」

唸りながら仕方なしにエステルはヨシュアを睨みつける。

「うふふ。相変わらず仲がいいんだね～」

「へ？」

「うらやましいなぁ。兄弟っていいよねー」

「あ、うん。よく言われる。えへへ」

「仲良きことは良き哉だよ～」

エステルはドロシーの言葉にありがとう、と笑顔になり、そんなエステルを見てヨシュアが肩をすくめつつ、優しい笑みを浮かべた。

「おおい。ドロシー！」

声に振り返る。ナイアル先輩がいつの間にか移動していて、北側出口に向かう通路のほうから呼んでいた。

「っと、先輩が呼んでるみたいだから、またね～！」

遊撃士コンビに別れを告げて、先輩のほうへと駆け寄る。

「あの、今エステルちゃんたちが――」

「ああ、見えた。それより、今日はもう退散するぞ。そろそろ夕方になるし、市長も姿を消しちまった」

「えっ。見失っちゃったんですか？」

そう言ったら、苦々しげな顔つきになった。まさか、ナイアル先輩がまかれちゃうなんて。

でも、とドロシーは思った。ちょうど良かったかも。

今日はろくな写真が撮れなかった。仕切りなおしたほうがいい気がする。次は、きっと……！

うん。エステルちゃんたちのおかげで少し元気になれたかも。

「ホテルに戻るんですか？」

「ああ」

「じゃあ、わたし、ちょっと今日撮ったぶんだけ焼きつけてきちゃいます」

自分的には決して満足できない写真だが無駄にはできない。写真が記事に採用されるかどうかを決めるのはドロシーではないのだ。

「その必要はありません」

凛、とした声だった。

顔をあげると、どこかで見たような……メイドさん？

「あんたは……」

「わたしは『あんた』などという名前ではありません。記者ナイアル・バーンズ殿。リラ、と申します」

いつの間にか目の前に立っていたのは朝に市長邸で出会ったメイドだった。

「オーバルカメラをお預かりさせていただきます」

「んだとぉ？」

ナイアル先輩の悪い目つきが増し増しに悪くなった。まるでこれから喧嘩をする前の不良さんみたいな目。ドロシーにはあまり見せたことがない。

「これは保安上の処置ですので、ご了承願います」

そう言うリラの後ろに、ずらりといつのまにか街の自警団が並んでいた。

否も応もなく、ドロシーのカメラは取り上げられ。

何もわからないまま、ふたりとも、マーケットの外へと放り出された。

6.

ドロシーとナイアルが外に出ると、もう夕焼け時だった。

太陽は西の街並みの向こうへと沈んでしまい、見えているのは赤く染まった雲だけ。

ちょっと不吉な色合いだけど、でも綺麗だ。

カメラは没収されてしまったから、撮ることはできないけれど、せめて……。

ドロシーは、直角にした両手の親指と人差し指を使って四角い枠を作り、空に向ける。ファインダーの代わりだ。

心のシャッターを切ろうとして——愕然となった。

空が……。

呆然としつつも、足は動き、先輩の後をついていって、辿りついたのは、居酒屋『キルシェ』だった。

扉を開ける。昼とは雰囲気が違っている。もう夕方だから、本来の居酒屋としての営業が始まっていた。料理の匂いに酒の匂いが混じっている。

奥の席を取り、夕食にした。ナイアル先輩は不機嫌そうな顔のまま酒を注文し、ドロシーはあまり食欲がわかずに、チーズリゾットをとる。

しばらくはふたりして黙々と口を動かして……。

ナイアルの杯が空になり、二杯目が注文される。ドロシーが食べ終わったのを見計らって、彼は煙草を取り出した。

咥えた煙草に火をつけながら「どうした？」と尋ねてくる。

「お空がどんな顔をしてたのかわからなかったんです」

ドロシーの答えを聞いたナイアルは一拍間を置いてから「さっきの夕焼けか？」と言った。

「はい」

「そりゃ、酔っ払ってたんだろ」

赤かったんだから、と続ける。

そうだろうか？　真面目に検討しかけて、目の前のナイアルがくっくっと笑っているのを見て、からかわれたのだと気づいた。

「……真面目な話なんですけどぉ」

「珍しいな」

「は？」

「おまえが、写真のことで俺に尋ねるなんて、って思ったんだよ。俺は記者だぞ」

だからわかるわけないだろ——と暗に言っている。

言われてみればその通りだ。どうかしてる。誰かに相談したことなんてなかったのに。

「どうした、スランプか？」

「……かも」

大変なことになった、と思った。

相手の表情が読み取れなければ、シャッターなんて切れない。ドロシーも、みなが雲や空の表情を読めないのは知識としては知っている。だから、何が大変な事態なのかわからないだろうけど——自分は困る。

「妙なことにつき合わせちまったからなぁ」

「あ、いえ、そんなことは……あるかもですけど」

「あるのかよ！」

「あ、いえ。その、ついうっかり本音がその」

ぶすっと膨れた表情になったナイアルが酒の残りをあおった。だが、次の瞬間、彼の表情が何かとっておきのイタズラを思いついた子どものような顔になる。

「そうだなあ。お互いこのままじゃ済ませられねぇよなあ」

「はい？」

ナイアルが空になった杯でテーブルを叩く。

「よし！　決めた。このまま引っ込んでられっか！　これは報道の自由に対する侵害だ！　市長だからって許されることじゃねえ！　行くぞ、ドロシー！」

「え、ええ⁉　ど、どこに？」

「市長の家だよ！　乗り込んで、おまえのカメラを取り返す！」

「こ、これからですかぁ」

もう外は真っ暗だ。夜も遅いのに。

「おい！　カメラが惜しくねえのか？　マイカメラがよ！」

「そりゃ……。取り返したいですよぉ。わたしのポチ君！」

「……名前つけてんのかよ」

スランプだからって愛するカメラを手放したいわけがない。

あれは——ドロシーのもうひとつの目なのだ。

自分の身体の一部だ。
「だったら――」
行くぜ！　とナイアルが宣言し、ドロシーは乗った。
こうして、ナイアルとドロシーと、そしてボース市にとって、長い長い夜が始まった。

『突撃！　メイベル市長の華麗な一日』（前編）　了

ファルコムニュース

ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！

ティオとリーシャがノートPCに!?

英雄伝説 碧の軌跡 オリジナルノートPC

『碧の軌跡』の人気キャラクター・ティオとリーシャの、40種類以上にも及ぶ録り下ろしボイスや、版権イラストが満載の『碧の軌跡』ノートPCが登場。詳細は予約特設サイト（http://www.digi-tsuhan.jp/shop/aonokiseki_pc/）でチェック！







5月6日に開催されるイベントのグッズを一部公開!

日本ファルコム×工画堂コラボグッズ

英雄伝説　碧の軌跡
ミシュラムタペストリーセット

1. タペストリー
2. e-maのど飴

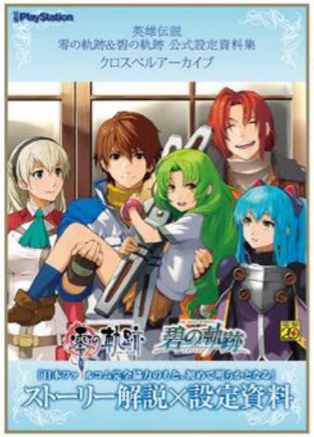


販売価格：3，000円（税込）

5月6日に秋葉原にて行われるイベント『ジャイアニズムフェス 2012 Spring』の工画堂ブースにて販売される、日本ファルコム×工画堂コラボグッズの一部をご紹介。このほかにも多くのグッズが販売予定なので、詳しくは工画堂HP（http://www.kogado.com/）にアクセスしてみよう。

これで『零』&『碧』の世界を解き明かせ!

英雄伝説 零の軌跡&碧の軌跡 公式設定資料集 クロスベルアーカイブ



ロイドたち特務支援課の軌跡を描いた『零＆碧の軌跡』の公式設定資料集がついに発売。美麗なイラストはもちろんのこと、本書で初めて解き明かされる謎も満載で、ファン必携の一冊になっているぞ。アスキー・メディアワークスより好評発売中。3360円（税込）。

人生半キャラずらし

jdkバンドのドラマー・オカジがファルコムと音楽と人生について熱く語ります！

MUSIC FROM BRANDISH（ミュージック・フロム・ブランディッシュ）





岡島俊治（Okaji）

1979年6月9日生まれ
ドラマー/パーカッショニスト/作曲、編曲家/プロデューサー
洗足学園短期大学器楽科打楽器専攻卒業。
2000年、ロックバンド『HeadPhonesPresident』のドラマーとしてデビュー。
2005年、同バンド脱退後はフリーミュージシャンとしての活動を開始。様々なアーティストのサポート、レコーディング、プロデュース等を行う。
2008年より『ファルコムjdkバンド』に参加。
主な共演歴：jdk BAND、Sixh.Opera、HeavensDust、野宮真貴、植村花菜、CORE OF SOUL、DENIAL、安藤裙央、清田愛未、中村幸代、一純悠人、momokomotion、越尾さくら…etc

どうもこんにちは、jdkバンドドラマーのオカジです。

さて今回の『人生半キャラずらし』で紹介したい作品はこちら！

『MUSIC FROM BRANDISH』

ブランディッシュも本当に僕の大好きなファルコム作品。最初にプレイしたのは勿論の事、PC-98版でした。これもやっぱりプレイした時は確か中1とかその辺りだったかと思います。ちゃんと代々木ファルコムショップで買ったんだぜ、いぇい！

当時、このゲームのシステムがどれだけ画期的だったかを僕は知らずにプレイしていたわけですが、とにかく最初プレイした感想は「え!?」って感じ（笑）。…なんたって、基本的にマウスオペレーションな上にアクションRPGだし、システムを理解するまでは何度フロッピーディスクを破り捨てようと思った事か…。（僕の持っていたのは5インチ版だったから破るという表現で間違っていないハズだ！）キーボードでもある程度は操作出来るんですが、要求される動作をこなそうとすると、とてもキーボードだけで手に負える代物ではありません。キーボードの方向キーで右ボタンを押すと画面そのものが右に回転しちゃうし、もうどうすればいいの、ファルコムさんっ!?って感じでした。

ところが、自分なりに操作に慣れ始めると、これが面白いのなんのって。顔の半分が隠れていて、ヒロインのドーラがあれだけ目の前でドジっ娘ツンデレ美女っぷりを見せつけても、全く動じる事のない主人公アレスに感情移入しまくり。トラウマになりそうな程のトラップだらけのダンジョン内では、ドーラの存在がどれだけの癒しだった事か…。

とは言え、アレスは何も喋らないし、今のゲームで言う所の感情移入というのとはちょっと違うのかもしれないけど、実際に自分が謎多き廃墟を彷徨い歩いているかのような気分になったものです。そして、その感情移入をより深い世界に誘ってくれたのが、このゲームの音楽なのです。本当にめっちゃ良いよ、ブランディッシュの曲。個人的に好きな曲を挙げて言っても「RUINS」、「ショップ(2)」、「古代の彫像」…ああダメだこれじゃあサントラを一曲目から挙げていってるだけに見えるじゃないか。そうじゃないんだ、本当に好きなんですってば。そして私的ベストファルコム音楽の中で3本指に入るであろう曲が「エンディング2」。これライブで演れたら叩きながら泣く自信あるわ。実はこの「エンディング2」にはアレンジバージョンもありまして、『PERFECT COLLECTION BRANDISH』というアルバムに収録されている、初代J・D・K BANDアレンジ版は最高です。嘘じゃなく本当にこの曲で当時ドラム練習してたからね。ロックドラミングはこの曲で学んだと言っても過言ではございません。いつの日かリスペクトを込めて、現jdkバンドで演奏出来る日が来る事を願っています…！

ブランディッシュを演奏するかどうかはさておき、現jdkバンドのライブにも皆様是非とも足を運んで頂きたい！ファルコム愛に満ちた最高の空間ですから。次回ライブは5月12日六本木ニコファーレです！　ファルコム音楽はライヴでも体感して頂きたい！最高ですよ！　皆様お待ちしていますね～！

それではまた次回お会いしましょう！











ファルコム楽曲4,000曲をiTunesで世界50ヶ国に配信中。
(ファルコム楽曲はすべて高音質化、DRMフリーが適用されたiTunes Plusでの配信となります)
※iTunes配信中のコラム関連アルバム情報※

発売中のコラム関連アルバム情報



[FALCOM SPECIAL BOX'93]
価格：6,000円　収録曲数：88曲(内、MUSIC FROM BRANDISHは24曲)
※「MUSIC FROM BRANDISH」は「ファルコム・スペシャルBOX'93(4枚組)」の中に収録されています。アルバム単体での配信は行っておりません。

[ブランディッシュ～ダークレヴナント～ オリジナルサウンドトラック]
価格：2,400円　収録曲数：28曲
※PSP「ブランディッシュ～ダークレヴナント～」用にアレンジされた楽曲を全収録



月刊 FALCOM MAGAZINE Vol.15

発行人	田中一寿
発行協力	日本ファルコム株式会社
編集	小渕智幸 大場恵美子
デザイン・DTP	さとうだいち
表紙ロゴデザイン	荻窪裕司（ビーニーズ）
発行	株式会社フィールドワイ 〒 101-0062 東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F TEL 03-5282-2211（代表） http://www.field-y.co.jp/
制作・販売協力	シナノ印刷株式会社

Falcom FanArt Collection

数々の名作で多くのファンを生み出してきた日本ファルコム。
FFCでは、そんなファルコムを愛するイラストレーターの方々の
イラストとコメントを毎月お届けします！



ヒロクニ

ファルコムさんと初めて出会った作品で、素敵なキャラたちが彩る深いお話にたくさん楽しませていただきました！ラストはいろんな意味で衝撃で忘れられません。シリーズ最新作「那由多の軌跡」も今からわくわくです。

『英雄伝説 空の軌跡FC』(2004)

「軌跡」シリーズの第１作目を飾ったＲＰＧ。遊撃士（ブレイサー）として成長していくエステルとヨシュアを描いた壮大な物語は、現在でも様々なメディアミックスで人気を博している。

COMICS

コミック「英雄伝説 空の軌跡」シリーズ続々刊行中！



英雄伝説 空の軌跡 ①～③

原作：日本ファルコム　漫画：啄木鳥しんき

判型：B6

定価：各630円（税込）

発行：バンダイビジュアル　発売：角川グループパブリッシング



ECアンソロジー

英雄伝説 空の軌跡

判型：A5

定価：924円（税込）

ANIMATION



「英雄伝説 空の軌跡 THE ANIMATION」好評発売中！

Blu-ray & DVD（全2巻）



vol.1

- ■ 封入特典：特製ブックレット（16P）
- ■ 映像特典：ノンクレジットOP&ED、オーディオコメンタリー
- ■ その他特典：新規描き下ろしジャケット

BD通常版：価格6,090円（税込）
DVD通常版：価格5,040円（税込）



vol.2

- ■ 封入特典：特製ブックレット（16P）
- ■ 映像特典：ノンクレジットOP&ED、PV集、オーディオコメンタリー

BD通常版：価格6,090円（税込）
DVD通常版：価格5,040円（税込）

公式サイト：http://www.sora-anime.com

発売・販売：バンダイビジュアル株式会社